

〔資料〕

菟足神社所蔵 富士山・熱田信仰史資料調査報告

阿部美香・大高康正・井上卓哉・
阿部泰郎・伊藤聡・三好俊徳・猪瀬千尋

はじめに

東海道旧街道沿いに立地する菟足神社（愛知県豊川市小坂井町宮脇）は、延喜式神名帳にも記載され、国指定重要文化財である大般若経（平安時代）をはじめ、愛知県指定有形文化財の梵鐘（南北朝時代）や古文書などの貴重な文化財を伝えている。そのなかに、富士村山修験の興法寺大鏡坊の檀那帳一冊と、熱田宮の神道伝授に関わる資料八通が含まれている。

これらの資料は、豊川市文化財保護審議会委員で菟足神社の元氏子総代中村重蔵氏からの情報提供をもとに、同社の川出厳郎宮司の格別のご配慮のもとで披閲が許されたものである。調査は東海地方に広がる富士山信仰に関する資料探訪の一環として、東京大学史料編纂所一般共同研究「参詣曼荼羅図を中心とする富士山信仰史資料の総合的研究と公開」（代表大高康正）の助成を受けて、二〇一九年六月八日に実施した。調査者は、大高康正、井上卓哉、阿部泰郎、三好俊徳、猪瀬千尋と阿部美香の六名である。

中村重蔵氏からは、興法寺大鏡坊の檀那帳および『熱田神参宮大事』『神祇灌頂酒印信』二通の翻刻と注釈、また大般若経についての解説など、氏が個人で調査した内容について情報提供をいただいた。それら並々ならぬご配慮を賜り臨んだ結果、檀那帳は天正十一年（一五八三）の年記もち、熱田宮の神道伝授に関わる資料は、上記二通に加えて『胎内五位大事』などを含む八通一具で現存し、大永三年から六年（一五二三～一五二六）の奥書を有するなど、いずれも中世に遡る貴重な史資料であることが確認された。これらの資料は、興法寺（村山浅間神社）や熱田神宮には現

存していない。また、愛知県（津島市）津島神社は、かつて長禄四年に遡る熱田関係の大事三通（『鈴口決』一通、『鈴大事』二通）を伝え、津島市史資料編に活字化され収録されるが、現状では市史編纂用原稿に翻刻された本文の原稿複写のみが収蔵されている。こうした状況のもと、菟足神社の神道資料が八通というまとまった数を伝えていることは、菟足神社と富士山および熱田宮との結びつきを考える上でも、さらに地域社会へと広がった神道説や宗教実践のありかたを考える上でも重要である。

熱田宮には、数多くの摂社の一つとして富士の神を祀る浅間社があった。宝永元年（一七〇四）に『塩尻』の著者である天野信景が著した『熱田神社問答雑録』には、「浅間ノ社」として「富士山ノ神ニシテ木花開耶姫を祭ルト云。按ズルニ、中世已来修験者多ク富士・白山等禪定ノコト、故ニ日本国中処々浅間ノ原廟ヲ造ル、駿州ノ外祭ルハ之ヲ非ズ礼^ニ」と記されている。富士の神と熱田の結びつきは、早く中世熱田宮における神道説に見える。例えば『熱田宮秘釈見聞』（南北朝時代）には、熱田大明神の御墓である白鳥塚に八葉九尊の住まう九穴があり、中穴に住まう大宮御殿の下の道は駿河国富士山頂にある人穴に通じていると記して、熱田と富士が、本地垂迹説に基づく世界観のなかで密接な結びつきをもって説かれていた²。そうした宗教空間をあらわす熱田宮の参詣曼荼羅には、享禄古絵図（徳川美術館蔵絹本着彩、現状では二曲一隻屏風）と伝称されるいわゆる参詣曼荼羅の古例や、熱田神宮所蔵の熱田宮古絵図（紙本残欠、室町時代）がある。そこには、鳥居や橋、神宮寺、内院などが描かれ、おそらく社参作法と深く関わる図像である。

近世に入ると、東海地方に白山・富士・立山を巡る三禪定が流行し、愛知県常滑市にある松栄寺からは安土桃山時代の富士参詣曼荼羅が発見され、大高康正により詳細な報告がなされている。³⁾ 曼荼羅には富士村山修験の中心地である興法寺が大きく描かれ、先達と、先達に導かれて富士に登拝する道者のすがたが、富士の宗教空間を構成する重要な要素のひとつとして表現されている。この興法寺を拠点に富士山表口登山道を管理したのが富士村山修験であり、その中心が大鏡坊をはじめとする別当三坊（大鏡坊、辻之坊、池西坊）であった。大鏡坊は、富士登拝の歴史を開いた末代人を祀る大棟梁権現社を掌り、外国人としてはじめて富士に登ったラザフォード・オールコックが宿泊したところとしても知られる。

菟足神社の富士および熱田の史資料からは、中世後期に菟足神社の神主が熱田宮の社参作法や口伝を伝え神事を掌り祭祀を営む一方で、その氏子である地域の人々が、小坂井の地に住まう富士の先達を介して、富士山信仰とも結びついていた消息が明らかになる。それは、東海道にあって、熱田と富士のそれぞれの霊地とつながり、重要な役割を果たしていた菟足神社の歴史と文化を照らし出すことになる。

本報告では、はじめに菟足神社の概要を述べて、第一部として大鏡坊三河国檀所帳、第二部として八通の神道資料を熱田宮神道灌頂大事等と総称し、影印・翻刻、解題等を付して紹介する。あわせて、熱田宮神道灌頂大事等の熱田宮をめぐる宗教テクストとしての位相や『胎内五位大事』については、特論を付し、本報告に収めることとする。

（阿部美香）

注

- 1 神道大系編纂会『神道大系 神社編十九 熱田』（一九九〇年）一六八頁。
- 2 地底の道を通して霊地が結ばれるビジョンは、伊豆・走湯山の縁起（鎌倉時代末（南北朝時代）とも呼応する。鴨志田美香「走湯山の縁起——異域の神人」走湯権現と「根本地主」白道明神・早追権現をめぐって」（『国文学解釈と鑑賞』六三卷一二号、一九九八年）。

- 3 大高康正「富士山の参詣曼荼羅を絵解く——重要文化財指定本と新出松栄寺本」（『聚美』一八号、二〇一六年）、同「富士参詣曼荼羅にみる富士登拝と参詣路

——新出の常滑市松栄寺本を対象に」（『国史学』二二二号、二〇一七年）。

菟足神社の概要

愛知県豊川市小坂井町に所在する菟足神社は、地域を代表する古社である。代表的な祭礼としては、旧暦正月七日に豊作を願う「田まつり」（県指定民俗文化財）が、四月第二週目の土日に「風まつり」が氏子たちの手によって行われている。山車が出たり、稚児踊りや手筒花火が奉納されたりと二日間にはわたり賑々しく行われる「風まつり」は、平安時代から行われていたようで、『今昔物語集』巻第十九や『宇治拾遺物語集』巻第四に収録される大江定基（法名寂照）の説話にもその様子が描かれる。

社伝によれば、祭神は雄略天皇の頃に穂国造であった葛城襲津彦の四世孫である菟上足尼命であるとされる。社名は古く十世紀前半に成立した『延喜式』神名帳にも見え、愛知県指定文化財に指定されている南北朝時代・応安三年（一三七〇）の鐘銘にも「参河国宝飯郡渡津郷菟足神社」と記される。一方で、後述する大般若経の奥書には「天文九年庚子正月廿二日菟足宇佐大明神宝前（欠）」（巻四百十一）などのように、菟足神社の「宇佐大明神」の御前で真読したとの記述を持つものが三卷ある。宇佐大明神と菟上足尼命との関係が問題となるが、是沢恭三氏は、宇佐大明神は、現在の菟足神社の別宮八幡宮（宇佐八幡宮とも呼ばれる）を指すとの理解を示している¹⁾。しかし、『菟足神社略記』²⁾によると、寛文四年（一六六四）に「本社」の再興造建と共に、別宮宇佐八幡宮を新造したということであり、安易に宇佐大明神と宇佐八幡宮を結びつけることはできない（なお、同書では、奥平家と神主家との縁組みから、稲木奥平土佐守家の祈願所として土佐八幡宮が建立されたと推定している）。

また、江戸時代にも両神の関係について考究されており、享保十四年（一七二九）書き上げの社家由緒書、文化十四年（一八〇七）の中山美石の『吉田領風俗問状答』、元治元年（一八六四）『新造替遷宮祝詞』などでは、本宮に対して別宮として八幡宮があったとしている（『菟足神社略記』）。ここでは具体的に天保十年（一八三九）成立の羽田野敬雄の著作『参河国官社考集説』の記述を示す。

今在「小坂井村」、今号「兔足八幡宮」、社領九十五石、神主川出氏、社説云、
祭神開化天皇皇孫大股王第二子子菟上王、天武天皇白鳳年中、依「神告」、合祀八幡神¹⁾、

宣隆云、今年天保十二年八月、神主川出氏ヲ訪テ祭神ノコトヲ問ヘルニ、往
古ハ品陀別命ヲ祀リシヲ、白鳳年中神託ニヨリテ、平井村ヨリ菟上足尼命ヲ
迎ヘ奉リ、相殿ニ祀リテヨリ、兔足八幡宮ト云、又別ニ瑞垣内ニアリテハ八
幡宮ナリト云リ、³⁾

まず、「兔足八幡宮と号す」とあるように、菟足八幡宮があったとされ
る。それに続いて「社説云」として、祭神は開化天皇皇孫の大股王の第二
子である菟上王とし、天武天皇白鳳年中に神告に依って八幡神を祀ったと
説明を加える。更に「社説云」の注として「宣隆（稿者注：砥鹿神社祠官）
云」とあり、古くは品陀別命（応神天皇を指すと思われる）を祀っていたが、
白鳳年中に平井村に祀られていた菟上足尼命を迎えて共に祀ることになっ
たので、もとの社を菟足八幡宮と呼ぶことになったとする。現状では、二
神の関係を決することは困難であり、後考を俟ちたい。

このように古代より連綿と続く歴史を有する菟足神社には、現在も複数
の文化財が所蔵されている。たとえば、先述の梵鐘は昭和三十九年（一九
六四）に、また祭礼古面五面は昭和四十年に愛知県指定有形文化財に指定
されている。なかでも最も有名なものは昭和三十六年に国重要文化財に指
定された大般若経全五八五巻であろう。以下に、菟足神社所蔵大般若経に
ついて紹介する。

大般若経は正式名称を『大般若波羅蜜多經』といい、中国唐の時代に玄
奘がインドから持ち帰った般若経典を四年の歳月をかけて翻訳・集成し龍
朔三年（六六三）に完成させたものである。全六百巻におよぶ諸経中最も
大部なもので、最高の智慧から見るとすべてのものは実体がないという空
思想を説いている。この大般若経を用いた法会は、日本においても古代か
ら行われている。その目的は、（１）国家安泰・五穀豊穡を祈るため、
（２）天災異変等が起こった時に行われる除災の祈禱、（３）追善・算賀の
ため、（４）異国降伏のため、（５）神前法楽のために分類され、特に



上：菟足神社 下：大般若経会（画像提供：豊橋市美術博物館）

（５）を目的として、神社に奉納されたという事例は多数みられる。菟足
神社においても、現在まで大般若経会が行われている。

菟足神社所蔵本は、武蔵坊弁慶により書写寄進されたとの伝承があるが、
奥書により、藤原宗成の立願により安元二年（一一七六）から治承三年
（一一七九）にかけて研究智によって書写されたことが明らかになっている。
研究智はどのような人物か知られていないが、わずか四年間に、しかも三
カ所（撰津国河辺郡南条富松庄、洛陽八条坊門猪熊御堂、肥後国益城郡石津村六
ヶ庄）で大般若経全巻を書写している。この偉業には驚嘆を禁じ得ない。
研究智書写後にどのような経緯で菟足神社に所蔵されるようになったのか
は明らかではないが、奥書に天文八年から九年（一一五三～一一五五）には

法会で用いられた旨が記されていることから、中世後期には伝えられていたようである。なお、『菟足神社略記』では、大般若経修補の願主であった朝玄を応安三年寄進の梵鐘銘にある朝阿弥陀仏と同一人物と考え、康永年間（一三四二～一三四四）には施入されていたと推定している。

書誌情報としては、楮紙黄檗染紙を用いた卷子装で、本紙には薄墨界が引かれており、格調高い写経と言えよう。その最も特徴的な点は、欠筆および則天文字が散見されることである。欠筆とは中国皇帝を敬い、その諱の末画を省いたものである。多くは宋の太祖の祖父の敬およびその音と通ずる文字であるため、宋代の經典をもとにしているとも考えられるが、一方で唐代の則天武后の制字である則天文字も使用されていることから、安易に底本を決することはできない。研意智により書き改められた可能性も含めて今後の検討が求められるが、このような特徴のある用字の大般若経は他に知られておらず、その点でも貴重な写本であると言えよう。

なお、文化財登録されている五八五巻の全てが研意智書写本というわけではない。破損や欠巻ができたことで、一部、写経・版経を以て補われている。大般若経六百巻一揃えで価値をもっていたことの証であろう。また、断簡も数紙遺されており、更に一部、錯簡も見られることから、巻数についても今後の十分な調査が必要である。なお、豊田市如意寺に大般若経巻第二百七十五、第三百四十四の二巻の写経が所蔵されているが、これは法量や字体および欠筆があること、さらに奥書の内容から判断するに研意智書写本である。伝承によると明治期に菟足神社から移されたとのことである⁵。以上、菟足神社について概略を述べたが、その具体的な活動については明らかではない。江戸慶長あたりから明治まで宝飯郡の真言宗寺院である財賀寺の僧によって大般若経会が行われていたことは知られているが、それ以外の神社・寺院とのつながりも不明と言わざるを得ない。今回の資料報告によって、その一端が明らかにされたことは、日本宗教文化史上の発見であるが、まずは菟足神社の歴史にとって重要なことであると言えよう。

（三好俊徳）

注

- 1 是沢恭三『重要文化財菟足神社の大般若経 解説―附・同目録―』（菟足神社社務所・小坂井町教育委員会、一九七三年）
- 2 川出清彦『菟足神社略記』（菟足神社社務所、一九七九年）
- 3 『神道大系 神社編十五 尾張・参河・遠江国』（一九八八年）所収。
- 4 稻城信子『日本中世の經典と勸進』（塙書房、二〇〇五年）。
- 5 菟足神社所蔵大般若経については、前掲注1のは沢解説を、愛知県内の大般若経については、拙稿「愛知県内の大般若経」『愛知県史 文化財四 典籍』（愛知県、二〇一五年）をご参照いただきたい。
- 6 前掲注1のは沢解説を参照。

〔翻刻凡例〕

第一部 大鏡坊三河国檀所帳

- 一、行取りは原本に随い、できるかぎり原本の姿を伝えることに努めた。
- 二、読解の便を考え読点を付し、旧字や異体字は通用の字体に改めたが、例外として「富」字については、原本で「富」とある場合はそのままとした。
- 三、中村重藏氏による翻刻をもとに、井上卓哉、大高康正が校正及び入力作業を行った。

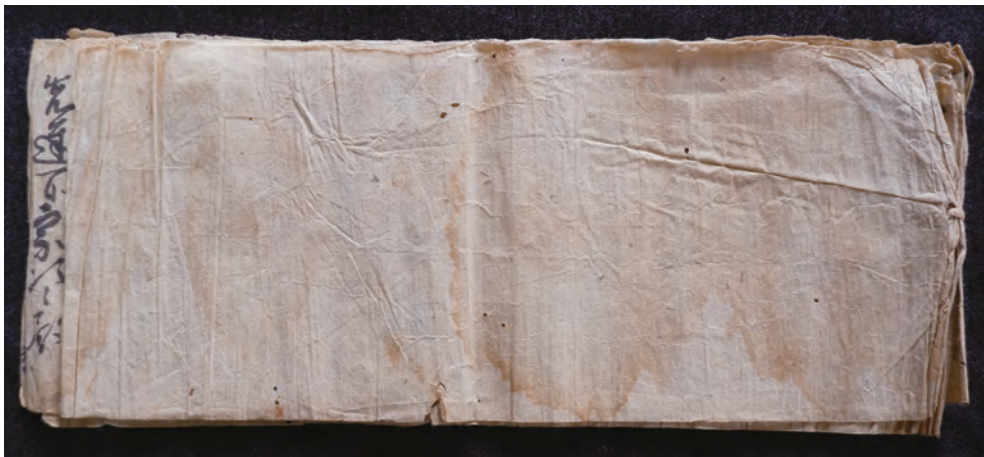
第二部 熱田宮神道灌頂大事等八通

- 一、行取りは底本に随い、できるかぎり原本の姿を伝えることに努めた。
- 二、読解の便を考え、旧字や異体字は通用の字体に改めたほか、私に句読点を付した。但し、「釵」「稜」「躰」の字はそのままとした。また必要な注記は右傍に（ ）で示した。
- 三、あらかじめ墨書された本文に、朱で訓を施す伝授の形を尊重し、朱墨の別を示した。但し、墨書された文字の上に朱が重ね書きされている場合は、左右の行に朱の文字を表記して、その別を示した。
- 四、朱印の位置は省略した。
- 五、八通のうち『神祇灌頂酒印信』『熱田神参宮大事』は中村重藏氏による翻刻をもとに、三好俊徳、猪瀬千尋の協力を得て、阿部美香が整えた。

第一部 大鏡坊三河国檀所帳

【影 印】

「第一紙表」

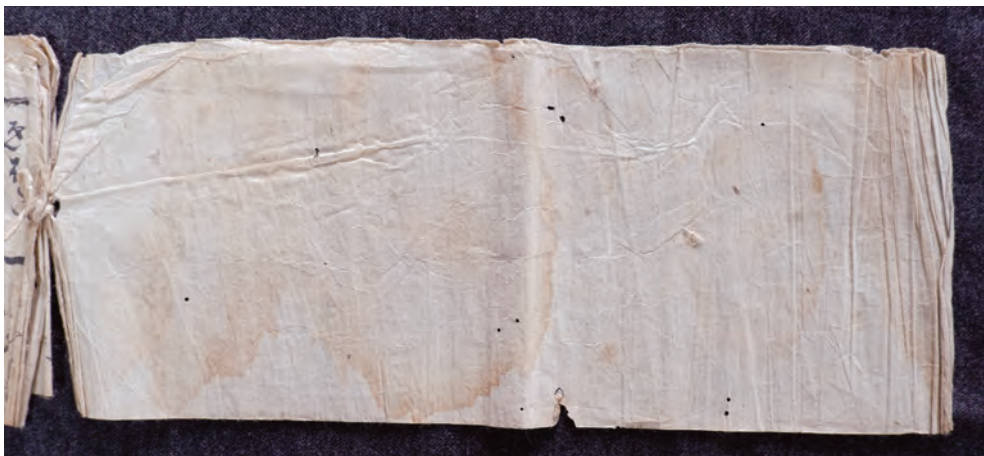


【翻 刻】

「第一紙表」

(記載なし)

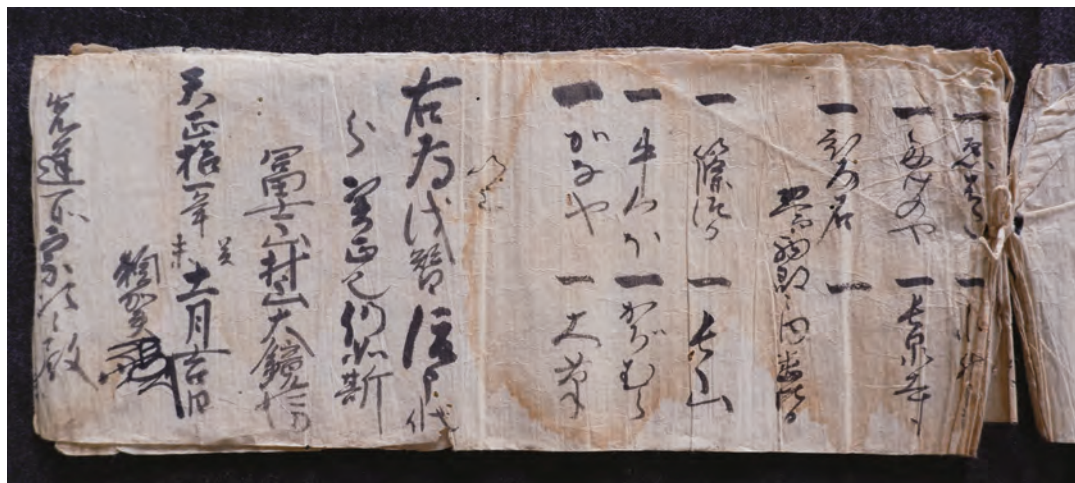
「第一紙裏」



「第一紙裏」

(記載なし)

「第二紙表」



「第二紙表」

- 一、ゑはた 一、小井
- 一、たけのや 一、長泉寺
- 一、ひろ石 一

惣而西郡之内悉皆

- 一、篠つか 一、長山
- 一、牛くほ 一、かぢむら
- 一、かなや 一、大草

以上

右為代替渡申候

分実正也、仍如斯、

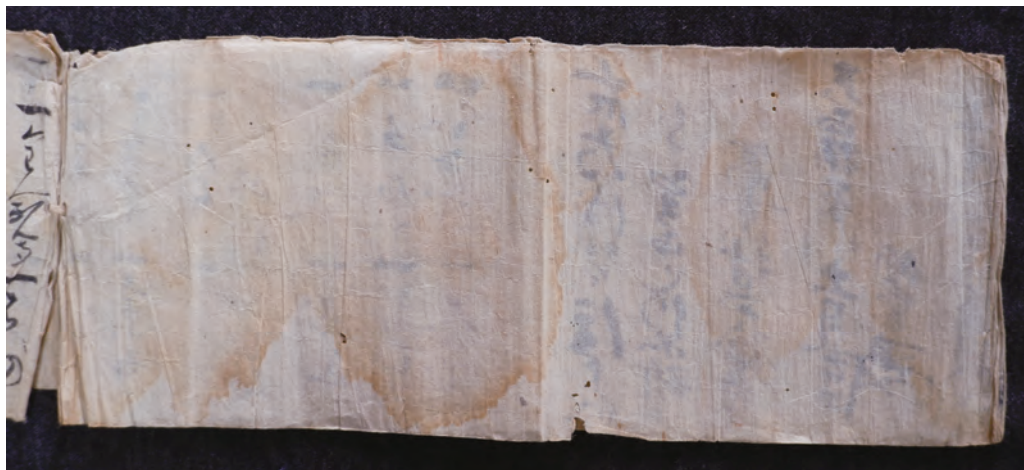
富士山村山大鏡坊

天正拾一年癸未十一月吉日

頼賀（花押）

先達所宗次良殿

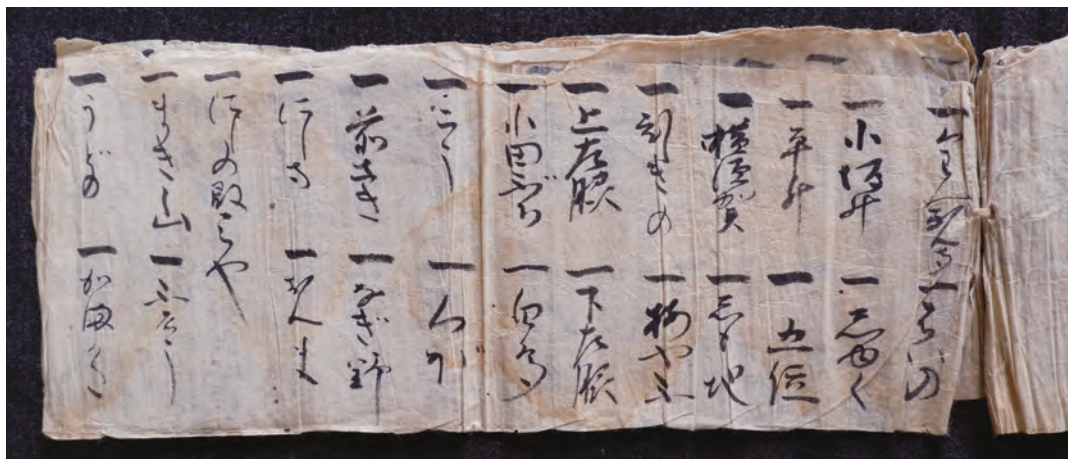
「第二紙裏」



「第二紙裏」

（記載なし）

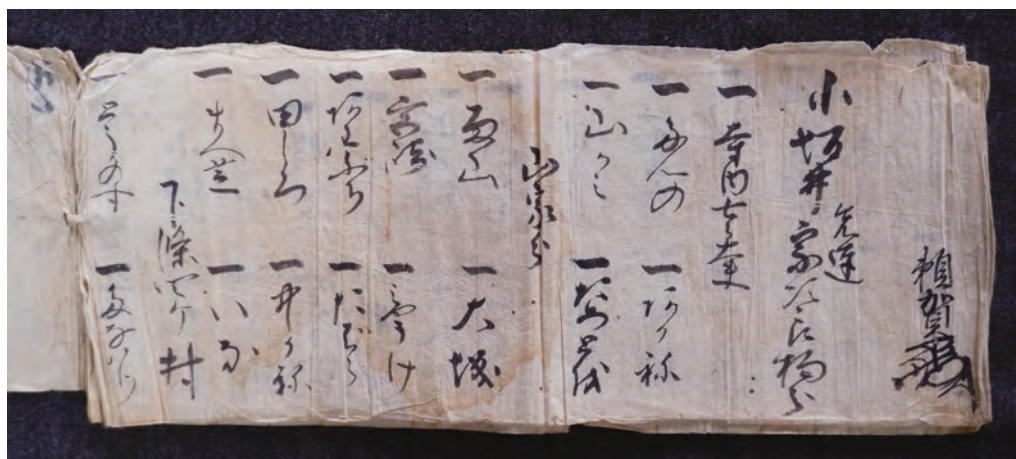
「第三紙表」



「第三紙表」

一、くわんおん寺	一、はいの
一、小坂井	一、しゆく
一、平井	一、五位
一、横須賀	一、しも地
一、ひしきの	一、梅やふ
一、上左脇	一、下左脇
一、小田ぶち	一、白鳥
一、こう	一、くぼ
一、前さき	一、なぎ野
一、にし方	一、おんま
一、にしの郡ミヤ	
一、まき山	一、ふさう
一、うどの	一、かまかた

「第三紙裏」



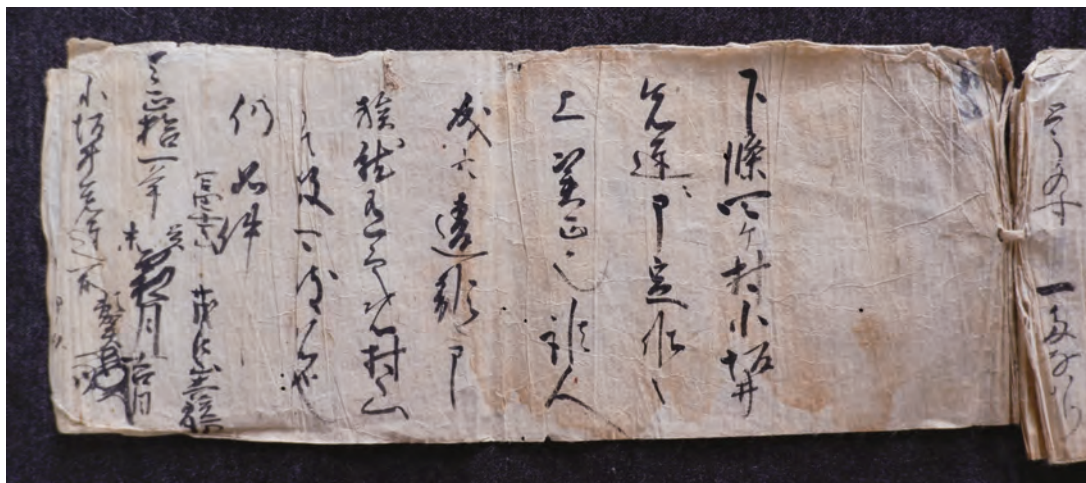
「第三紙裏」

頼賀 (花押)

先達
小坂井 宗次良拘分

一、寺内七良大夫	一、あかね
一、たんの	一、ためとを
一、山かミ	
山家分	
一、雨山	一、大城
一、宮崎	一、ミやうけ
一、あわぶち	一、たばら
一、田しろ	一、中かね
一、まへ芝	一、いな
下條四ヶ村	
一、とうのす	一、たなはら

「第四紙表」



「第四紙表」

下條四ヶ村小坂井

先達申定候之

上実正也、訴人

成共違難申

族然有而者村山

にて改可致者也

仍如件、

富士山 茂良山大鏡坊

天正拾一年癸未霜月吉日

賴賀(花押)

小坂井先達所

申候

「第四紙裏」



「第四紙裏」

大鏡坊

先達

小坂井 宗次良殿

【解題】大鏡坊三河国檀所帳 富士山興法寺大鏡坊の檀那場と小坂井先達

第一節 『大鏡坊三河国檀所帳』の内容

この史料は、中世後期の天正十一年（一五八三）、富士村山修験の興法寺で別当三坊をつとめた一つ大鏡坊の頼賀が、小坂井在住の宗次郎（史料では「宗次良」という人物に発給した文書である。史料の形態は、ほぼ同じ大きさの全紙を折紙とし、右端中央部分をこより綴じにした、第一紙から第四紙までの計四枚の横帳形式である。寸法は最大値で、縦一四・九cm、横三四・九cmである。

史料に表題は付せられていないが、内容としては三河国八名郡の下條四ヶ村その他を「小坂井先達所」とある宗次郎の檀那場として認めるものである。史料には特定の檀那名を書き上げるのではなく、活動範囲としての地域名を書き上げているので、仮題として『大鏡坊三河国檀所帳（小坂井先達所檀那場）』としておく。

宗次郎については、中村重藏氏より菟足神社の宮司家である川出家歴代の「良久」であると、慶長七年（一六〇二）の棟札資料で確認できるといふ教示を得た¹。今回紹介する史料が菟足神社伝来の史料群に含まれていることから、宗次郎が川出家に関わる人物という可能性は高いと思うが、二十年程の年代差があることには注意したい。

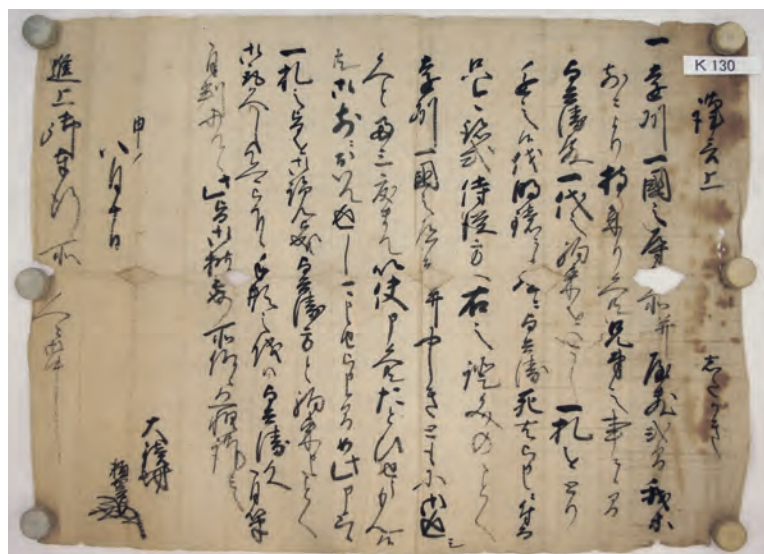
またこの史料には、天正十一年の年記と差出者の大鏡坊頼賀の花押が記されている。頼賀の花押は、興法寺に伝来した史料群（村山浅間神社所蔵文書、富士宮市寄託）に、同人発給の慶長十三年（一六〇八）と推定されている文書があり、そこにも記されている（写真）。両史料を比較しても、「檀所帳」は頼賀による原本と判断して良いのではないだろうか。頼賀の事跡であるが、近世江戸時代の系図等によると、富士山本宮浅間大社大宮司の富士信忠の娘を妻とし、元和五年（一六一九）二月五日に死去している⁴。

また天正十一年七月二日に大鏡坊の名跡を引き継いでいるようなので、この事跡が正しければ、同年十一月に出された小坂井先達所への『檀所帳』

とは、大鏡坊の檀那場を頼賀が継承した際に発給したものと捉えることができる。「第二紙表」に「代替渡申候」とある部分は、先達宗次郎の代替りという意味で考えることもできるが、大鏡坊頼賀の代替りとして考えた方がいいのかも知れない。

また、この『檀所帳』は富士村山修験の勢力が発給した文書の正文としては、現在確認できる最古のものとなる。また在地に実際に残っていたということでも注目される。例えば写しということであれば、同じ三河国内の東栄町に伝来する文書群の中に、文化十一年（二八一四）六月書写の天文二十一年（一五五二）九月十六日の興法寺頼慶の書上（精進中勤行之事）が存在する⁵。ただ、果たして天文二十一年に本当に発給されたものかどうかは判断できない。同じ三河国内で、『檀所帳』と同様に富士先達を勤めた者に先達所を保証したと思われる内容の文書は、「三川鳳来寺之内」に関する文禄二年（一五九三）六月七日の大鏡坊頼賀が発給した文書が、写であるが存在する⁶。つまり頼賀は、天正十一年の『檀所帳』のように具体的に村々を書き上げた「檀所帳」を他の地域においても発給していた可能性が想定できる。

富士村山修験では、各々の地域で既に活動拠点となる檀那場をもってい



大鏡坊頼賀の花押（村山浅間神社所蔵文書 K130）

た宗次郎のような宗教者を、富士先達として把握することによって、諸国へ急激に檀那場を広げていったのではないだろうか。その檀那場に含まれる村々には、富士山表口から登拝を行う富士講が組織されていたものと思われる。

(大高康正)

第二節 小坂井先達所宗次郎の檀那場について

一 檀那場の属性

この史料は、天正十一年（一五八三）十一月に大鏡坊の頼賀より、小坂井先達所宗次郎に対して出されたものである。その内容は、大鏡坊頼賀の代替わりをうけて、宗次郎の檀那場を確認・認証することを主要な目的とし、五〇件を超える地名が記されている。

これらの地名については、中村重藏氏がおこなっていた現在地の比定を参考に、それぞれの地名と対応する現在地を改めて再確認しながら地図上にプロットした。中世における富士村山修験の先達が抱えていた檀那場の空間的な広がりを示す一つの事例として取り上げたい。

地名を地図上にプロットするにあたり、それらが記された部分を確認してみると、全てが同列に記されているわけではなく、大きく分けて二つの属性が確認できる。その一つが、地名が記された部分の冒頭に確認できる「小坂井先達宗次郎拘分」（以下「宗次郎拘分」）である。

その記述の通り、先達の宗次郎が持っている場所と理解できるものの、それがこの史料に登場する地名全体を包括していると素直に捉えることは難しい。というのも、「宗次郎拘分」という記述に続いて、「一、寺内七良大夫、一、たんの、一、あかね、一、山かみ、一、ためとを」という地名が記述されるが、その後に「山家分」と記されているのである（第三紙裏）。この記述からすれば、前述の五件の地名が「宗次郎拘分」であり、それとは別の属性として、「山家分」が存在していると理解すべきだろう。しかしながら、それぞれの属性の差異について、本史料から読み取ることはいきない。

また、上記のもの以外にも「下條四ヶ村」（第三紙裏）、「惣西郡之内悉皆」（第二紙表）という記述が確認できる。まず、「下條四ヶ村」という記

述であるが、中村氏によれば、旧下条村を構成する五井、暮川、天王、八反ヶ谷、藤ヶ家、堀之内、竹之内、白石新田、犬之子の九村のうち四村を示すものではないかとされる。ただし、「下條四ヶ村」の記述の前後にみられる地名に、上記九村内に位置すると比定されるものが無いため、どのように理解するかについては、さらなる検討が必要である。

一方、「惣西郡之内悉皆」という記述であるが、この記述から十件の地名を遡ると、「一、にしの郡ミヤ（西の郡三谷）」という地名を確認することができ（第三紙表）。この「にしの郡ミヤ」から「惣西郡之内悉皆」までの間に挙げられている地名は、全て西郡（現在の蒲郡市）に位置すると比定できることから、当時の西郡は宗次郎の檀那場であると理解することが可能かもしれない。

ここまで述べてきたように、この史料に挙げられた五〇件を超える地名には、いくつかの属性が認められる（表1）。以下では、こうした属性を念頭に、宗次郎の檀那場の空間的な広がりについて考察する。

二 檀那場の空間的な広がり

図1は、前掲の表1に示した比定地を、明治二三年発行の旧版地図上に落としたものである。まず、「宗次郎拘分」（●で表示）については、現在のJR東海道本線の愛知御津駅および、三河大塚駅近辺の場所に集まっている。「拘分」とあることから、このあたりの地域が、宗次郎が直接的に支配・あるいは管理するような場所として捉えることも可能かもしれない。一方で、「山家分」であるが、表1で示したようにどこまでを山家分として捉えていいのかははっきりしない。しかし、「山家分」と「下條四ヶ村」の間に確認できる地名のほとんどが、岡崎方面へと流れる男川とその支流沿いの山間の集落に比定することができる。この点から「山家分」とは、山間地の檀那場を意味しているものとも考えることができるのではないだろうか。また、「下條四ヶ村」以下に記載されている地名の中に、山間地に比定できるものがほとんど見られないことから、表1の「雨山」から「いな（伊奈）」までを、ここでは「山家分」として捉えておきたい（●で表示）。ここまで述べてきたことを前提に、図1を改めてみてみると、「檀所

表 1 先達宗次郎の檀那場一覧

属性	場 所	比 定 地	
宗次良拘分	寺内七良大夫	不明	第 三 紙 裏
	たんの（丹野）	蒲郡市相楽町	
	あかね（赤根）	豊川市御津町赤根	
	山かミ（山神）	蒲郡市大塚町	
	ためとを（為当）	豊川市為当町	
山 家 分	雨山	岡崎市雨山町	第 三 紙 裏
	大城	岡崎市大代町	
	宮崎	岡崎市宮崎町	
	ミやうけ（明見）	岡崎市明見町	
	あわぶち（淡渚）	岡崎市淡渚町	
	たばら（田原）	新城市作手田原	
	田しろ（田代）	岡崎市田代町	
	中かね（中金）	岡崎市中金町	
	まへ芝（前芝）	豊橋市前芝町	
	いな（伊奈）	豊川市伊奈町	
下條四ヶ村		旧下条村（現豊川市・豊橋市）か	第 三 紙 表
	とうのす（鶴巣）	岡崎市鶴巣町	
	たなはら	不明	
	くわんおん寺（観音寺）	豊川市御津町金野観音寺	
	はいの（灰野）	豊川市御津町灰野	
	小坂井	豊川市小坂井町	
	しゆく（宿）	豊川市宿町	
	平井	豊川市平井町	
	五位（五井）	豊橋市下五井町	
	横須賀	豊橋市横須賀町	
	しも地（下地）	豊橋市下地町	
	ひしきの（日色野）	豊橋市日色野町	
	梅やふ（梅藪）	豊橋市梅藪町	
	上左脇（上佐脇）	豊川市上佐脇町	
	下左脇（下佐脇）	豊川市下佐脇町	
	小田ぶち（小田淵）	豊川市小田淵町	
	白鳥	豊川市白鳥町	
	こう（国府）	豊川市国府町	
	くぼ（久保）	豊川市久保町	
	前さき（前崎）	豊川市国府町前崎	
	なぎ野（坪野）	豊川市御津町坪野	
	にし方（西方）	豊川市御津町西方	
	おんま（御馬）	豊川市御津町御馬	
西 郡	にしの郡ミヤ（西郡三谷）	蒲郡市三谷町	第 二 紙 表
	まき山（牧山）	蒲郡市豊岡町	
	ふさう（府相）	蒲郡市府相町	
	うどの（鶴殿）	蒲郡市神ノ郷町	
	かまかた（蒲形）	蒲郡市蒲郡町	
	ゑはた（江畑）	蒲郡市竹谷町江畑	
	小井（五井）	蒲郡市五井町	
	たけのや（竹谷）	蒲郡市竹谷町	
	長泉寺	蒲郡市五井町長泉寺	
	ひろ石（拾石）	蒲郡市拾石町	第 二 紙 表
	篠つか（篠束）	豊川市篠束町	
	長山	豊川市下長山町	
	牛くほ（牛久保）	豊川市牛久保町	
	かちむら（鍛冶村）	豊川市中条町	
	かなや（金屋）	豊川市金屋町	
	大草	豊川市御津町大草	

帳」に描かれている宗次郎の檀那場は、「宗次良拘分」を中心に、近世東海道
の吉田宿から御油宿にかけての街道周辺の集落、「山家分」と称される山間地の集落、そして「西郡」一帯の集落（●で表示）という形で、その範囲は東西約一五キロメートル、南北約二〇キロメートルの範囲に広がっていることが明らかとなった。

この範囲について、この史料とほぼ同時代の文禄二年（一五九三）、村山大鏡坊頼賀が三河鳳来寺内の先達所に出した史料（旧大鏡坊富士家文書K二〇六号「三河国鳳来寺内先達所之事写」⁸）と比較すると、かなり広大であるこ

とがわかる。

ただし、このように広大な範囲の檀那場を有することが宗次郎だけに限られることなのか、それともこの時代においては一般的なことであったのかについては現段階では判断材料となる史料が限られているというのが現状である。今後の課題として、富士村山修験の活動範囲内における同時代史料の確認を進めるとともに、それらのさらなる比較が必要であることを記しておきたい。

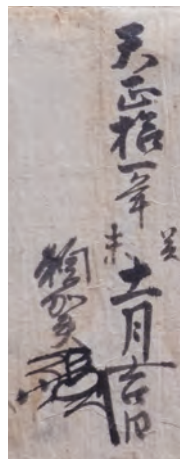
（井上卓哉）

注

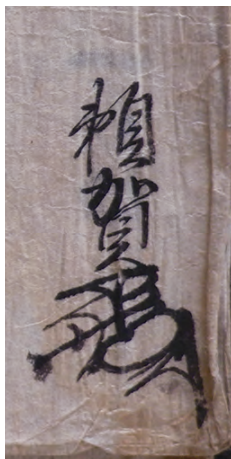
- 1 「良久」は、慶長七年（一六〇二）の棟札資料に「神主河出宗次郎良久」として登場する。中村重藏氏のご教示では、近代以降の系図で「良久」の先々代が永禄年間頃の「良政」、先代が「茂政」となる。あるいは天正十一年（一五八三）の時点では、「良久」以前の人物が「宗次郎」を名乗っていた可能性も考えられよう。
- 2 「謹言上（遠州一国と屋敷二軒を辻之坊与右兵衛死去につき返却願ひ）」（村山浅間神社関連文書「旧大鏡坊富士家文書」K一三〇号、富士宮市教育委員会寄託）。
- 3 「山役銭之事、富士山伝記并興法寺暦代写、興法寺々務之事、池西坊伝記写、外」（村山浅間神社関連文書「旧大鏡坊富士家文書」K五五号、富士宮市教育委員会編『村山浅間神社調査報告書』二〇〇五年、一一五・一一六頁）。
- 4 「元禄高由緒書上帳（大鏡坊系図）」（村山浅間神社関連文書「旧大鏡坊富士家文書」K一二二号、前掲注3『村山浅間神社調査報告書』一三九・一四〇頁）。
- 5 東栄町下田、藤谷喜代司家文書5「精進中勤行之事・文化十一年六月」（前掲注3『村山浅間神社調査報告書』二二三頁）。
- 6 「三河国鳳来寺内先達所之事写」（村山浅間神社関連文書「旧大鏡坊富士家文書」K二〇六号、前掲注3『村山浅間神社調査報告書』二四〇・二四二頁）。
- 7 国土地理院保有の旧版地図「蒲郡」、「御油」、「高富村」、「藤川村」、「豊橋」を使用。菟足神社所蔵の明治八年（一八七五）の同社氏子の村々を書き上げた覚書によると、これらの比定地のうち、梅藪・日色野・平井・小坂井・宿・五井・横須賀・下地・伊奈・前芝は菟足神社氏子の村々となる。
- 8 前掲注6「三河国鳳来寺内先達所之事写」参照。

〔参考〕頼賀花押一覧

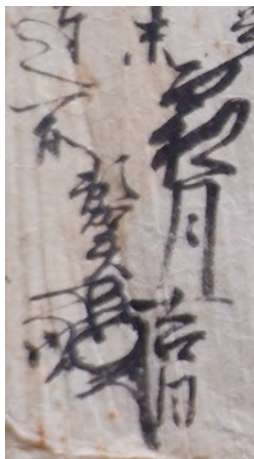
「三河国檀那帳」第二紙表



第三紙裏



第四紙表



村山浅間神社所蔵文書K一三〇



この他、男川上流域に山家分の宮崎・田原・田代に比定される3集落がある。



図1 先達宗次郎の檀那場

この図の作成に当っては、国土地理院保有の旧版地図（「蒲郡」、「御油」、「高富村」、「藤川村」、「豊橋」（いずれも明治23年発行））の謄本を使用した。

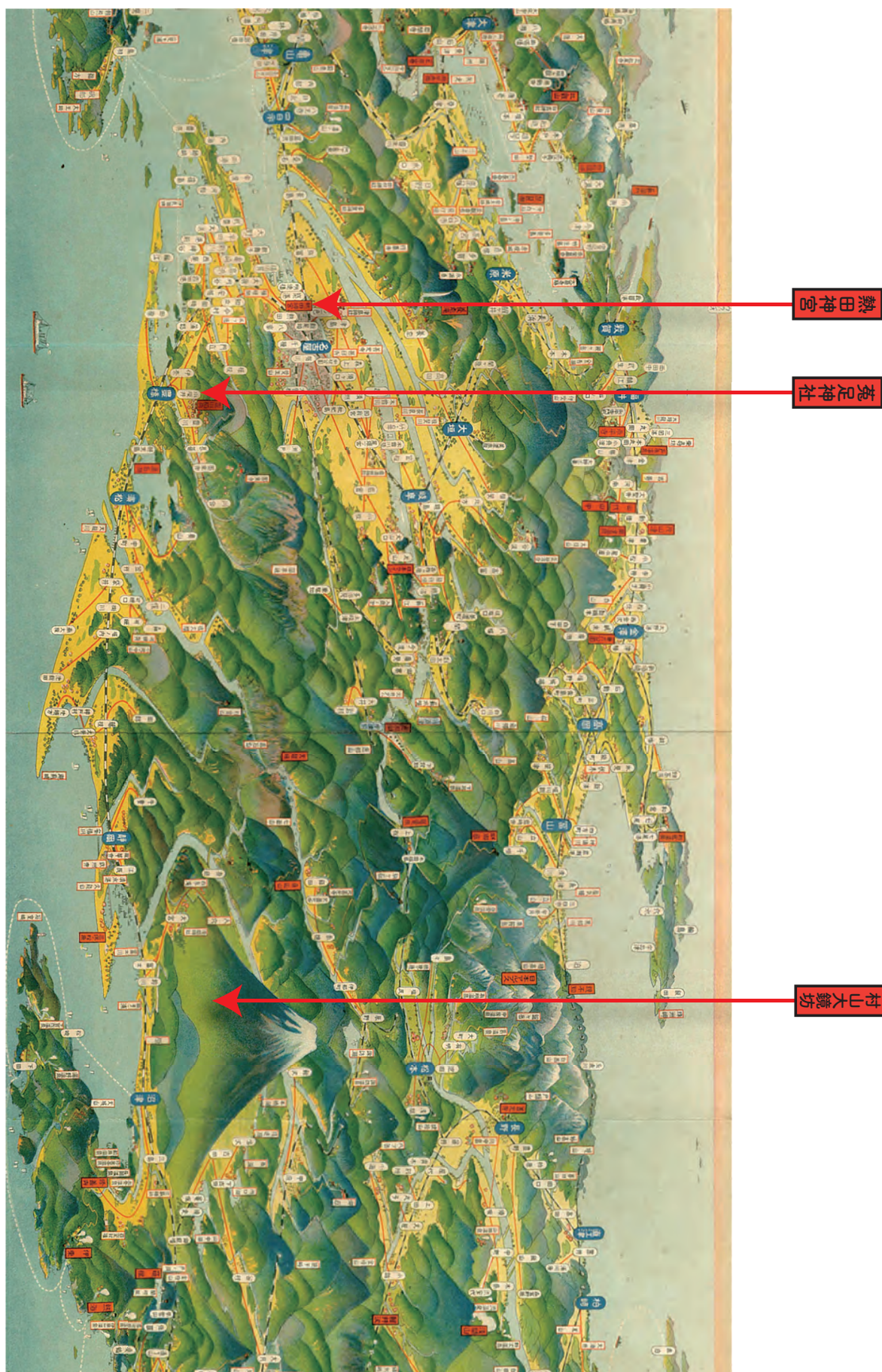
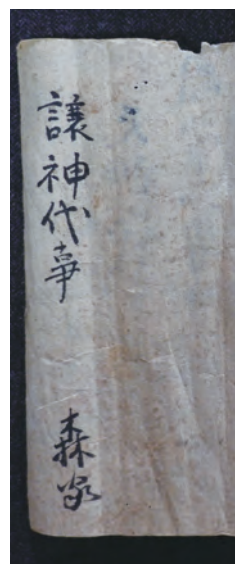


図 2 菟足神社・熱田神宮・村山興法寺大鏡坊の位置関係
この図の作成に当っては、吉田初三郎『日本島嶼近畿東海大図絵』昭和 2 年（個人蔵）を使用した。

第二部 熱田宮神道灌頂大事等八通

【影 印】

一 讓神代事



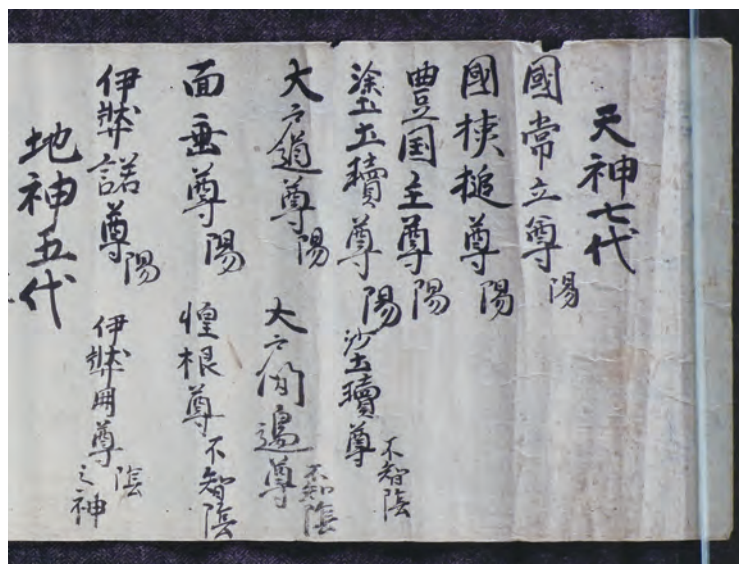
(端裏)

【翻 刻】

一 讓神代事

讓神代事 森家

「端裏



天神七代

「内題

國常立尊陽

國狹槌尊陽

豐國主尊陽

塗土瓊尊陽

沙土瓊尊 不智陰

大戸道尊陽

大戸間邊尊 不知陰

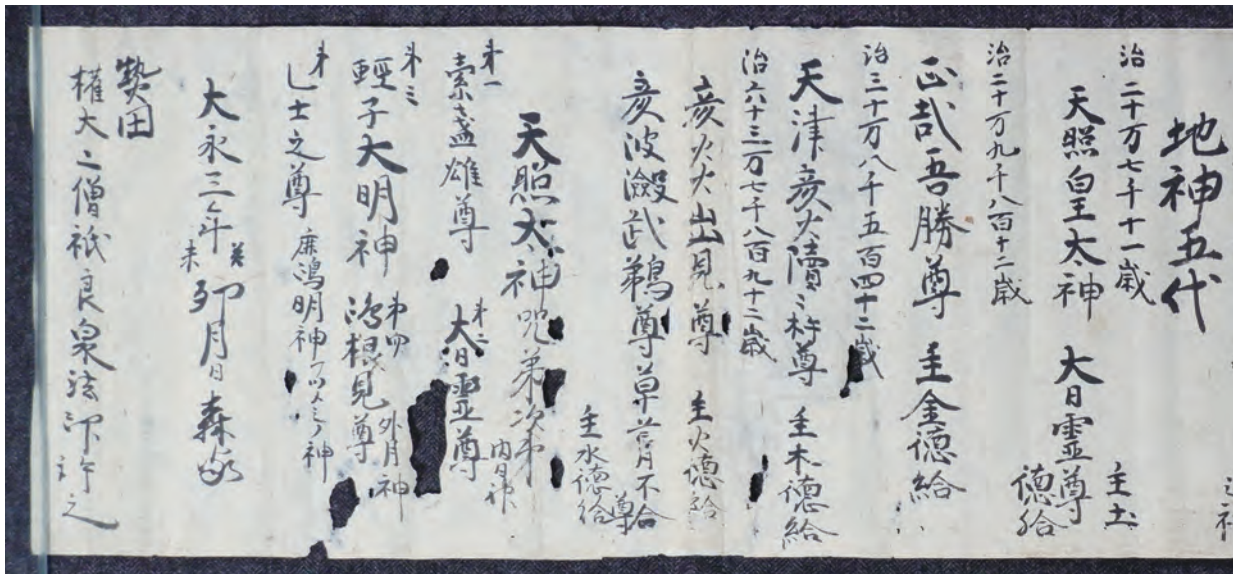
面垂尊陽

惶根尊 不智陰

伊弉諾尊陽

伊弉冉尊 陰之神

地神五代



地神五代

治二十万七千十一歳

天照皇太神 大日靈尊 主土

治二十万九千八百十二歳

正哉吾勝尊 主金徳給

治三十万八千五百四十二歳

天津彦火瓊杵尊 主木徳給

治六十三万七千八百九十二歳

彦火火出見尊 主火徳給

彦波瀲武鸕尊草葺不合尊 主水徳給

天照太神呪弟次第

第一 索蓋雄尊 第二 大日靈尊 内日神

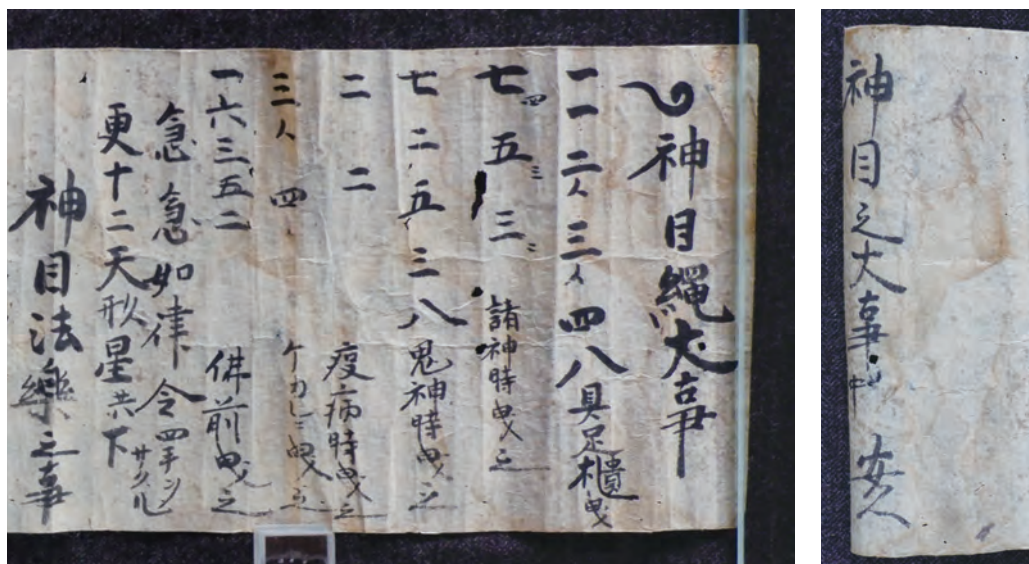
第三 蛭子大明神 第四 嶋根見尊 外月神

第五 土之尊 鹿嶋明神 フツヌシノ神

大永三年 癸卯月日 森家

熱田 権大二僧祇良泉法印許之

二 神目繩大事



二 神目繩大事

神目之大事_中 安久

「端裏

庵神目繩大事

「内題

一一二々三々四八具足櫃曳、

七四 五三 三三 諸神時曳之、

七二五 三八 鬼神時曳之、

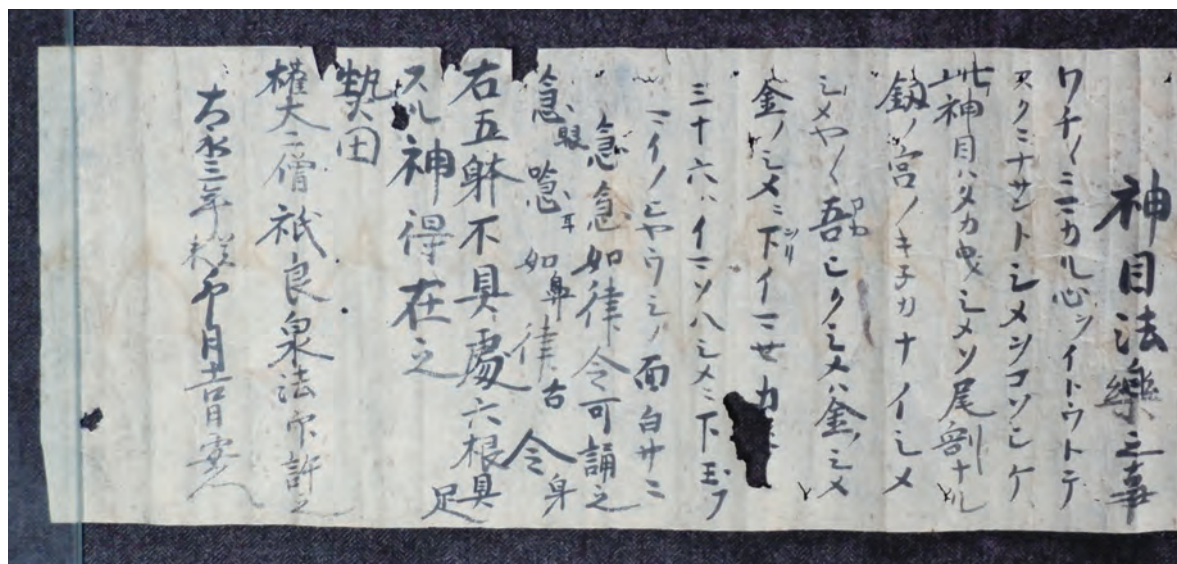
二 二 疫病時曳之、

三々 四 ケカレニ曳之、

一六三五二 仏前曳之、

急急如律令_{四手ヲサクル}

更十二天形星_{其下}



神目法樂之事

ワチノニマカル心ヲイトウトテ

スクニナサントシメヲコソシケ

此神目ハタカ曳シメソ尾割ナル

釵ノ宮ノキネカナイシメ

シメヤノ吾シクシメハ金ノシメ

金ノシメニ下イマセカ

三十六ハイマソハシメニ下玉フ

マイノシヤウシノ面白サニ

急急如律令可誦之、

急眼 急耳 如鼻 律舌 令身

右五躰不具処、六根具足

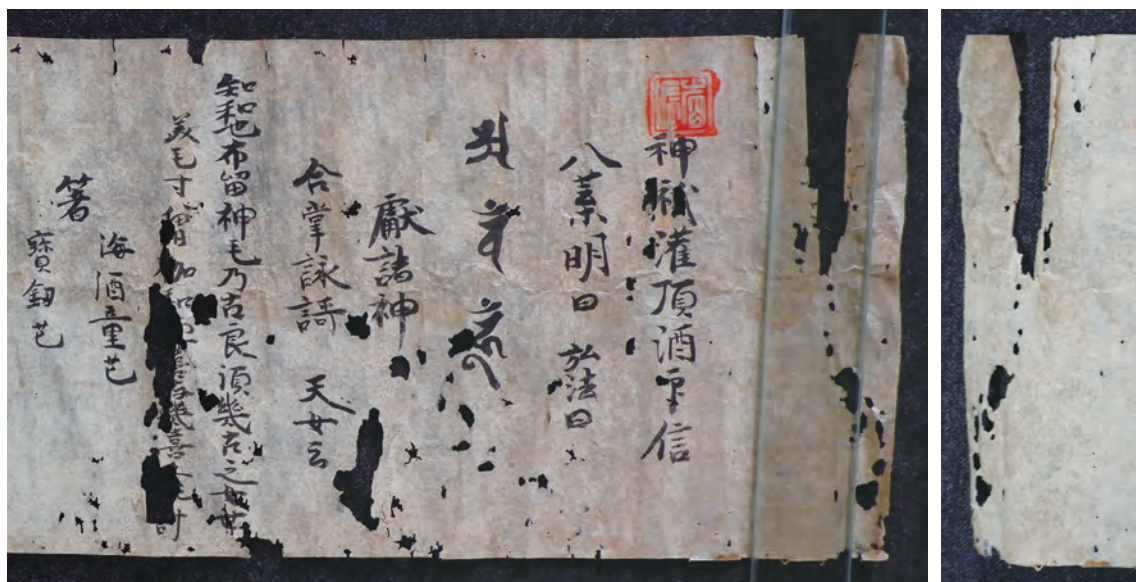
スル、神得在之、

熱田

権大二僧祇良泉法印許之

大永三年癸卯月吉日 安久

三 神祇灌頂酒印信



三 神祇灌頂酒印信

「端裏

神祇灌頂酒印信

「内題

八葉明日 弘法曰

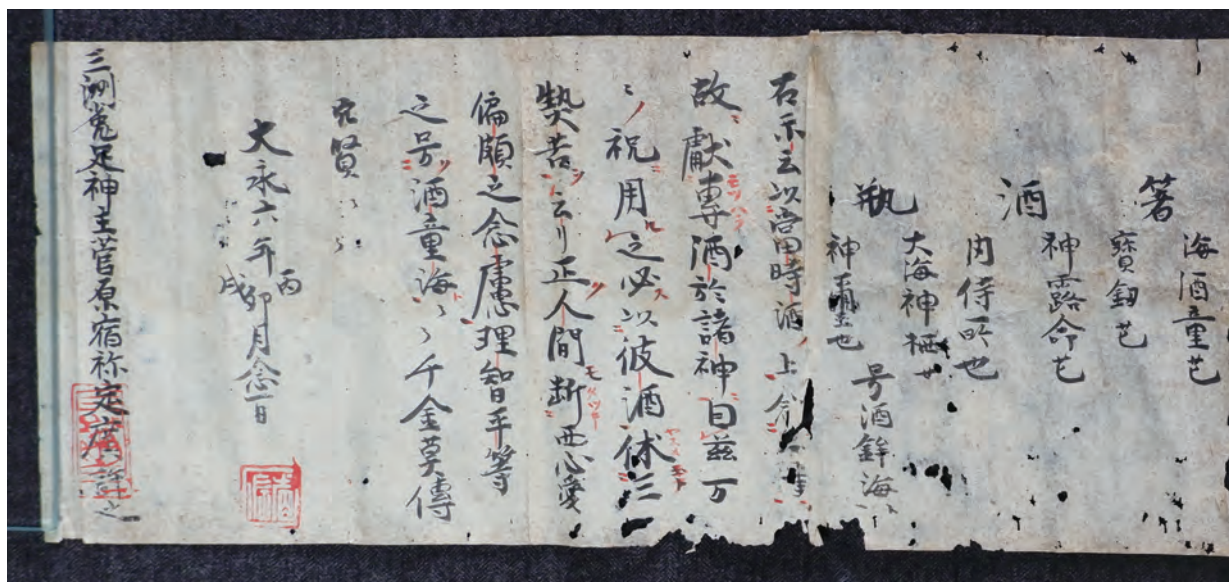
知和也

獻諸神

合掌詠調 天女云、

知和也布留神毛乃古良須幾古之女世

美毛寸曾伽和□□与幾喜□□計



箸
海酒童也

寶釵也

酒
神露命也

内侍所也

大海神栖也

瓶

神璽也

号酒銚海

右示云、以當時酒上

故獻專酒於諸神、因茲、万

祝用之、必以彼酒休三

契苦云、正人間断、西心愛

偏頗之念、慮理智平等

之号、酒童海、千金莫傳

穴賢

大永六年丙戌卯月念一日

三洲菟足神主菅原宿祢定広許之

箸
海酒童也、
寶釵也、

酒
神露命也、
内侍所也、

瓶
大海神栖也、
神璽也、
号酒銚海、

右示云、以當時酒上

故獻專酒於諸神、因茲、万

々祝用之、必以彼酒休三

熱苦云、正人間断、西心愛

偏頗之念、慮理智平等

之号、酒童海、千金莫傳、

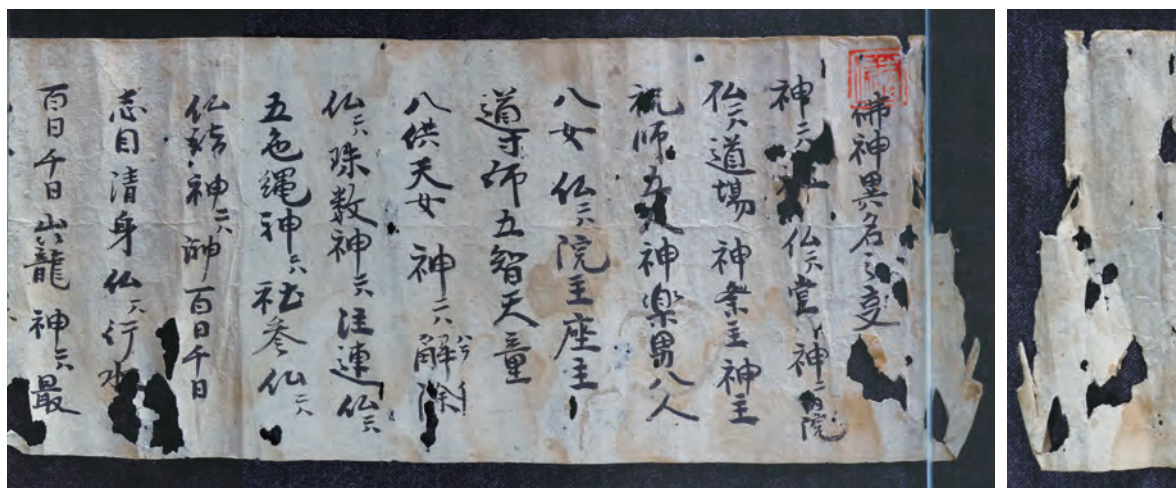
穴賢々々、

大永六年丙戌卯月念一日

三洲菟足神主菅原宿祢定広許之

四

仏神異名之事



四

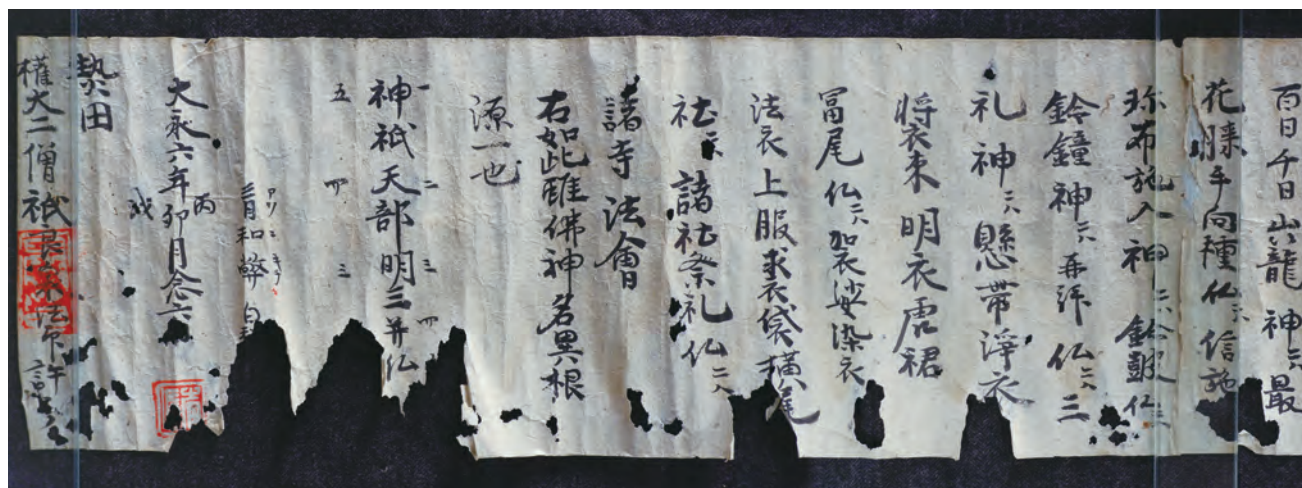
仏神異名之事

「端裏

仏神異名之事

「内題

神ニハ社、仏ニハ堂ト、神ニ内院、
 仏ニ道場、神祭主、神主、
 祝師、五人神樂男、八人
 八女、仏ニ院主、座主、
 導師、五智天童、
 八供天女、神ニ解除、
 仏ニ珠数、神ニ注連、仏ニ
 五色繩、神ニ社参、仏ニ
 仏詣、神ニ櫛、百日千日
 志目清身、仏ニ行水、
 百日千日山籠、神ニ最



花膝手向種、仏ニハ信施

珍布施入、神ニハ鈴鼓、仏ニハ

鈴鐘、神ニハ再拜、仏ニハ三

礼、神ニハ懸帶、淨衣、

装束、明衣、唐裙、

富尾、仏ニハ袈裟、染衣、

法衣、上服、袈袋、横尾、

社ニハ諸社祭礼、仏ニハ

諸寺法會、

右如此、雖佛神名異、根

源一也、

神祇一ニ天部二ニ明三ニ菩薩四ニ仏五ニ

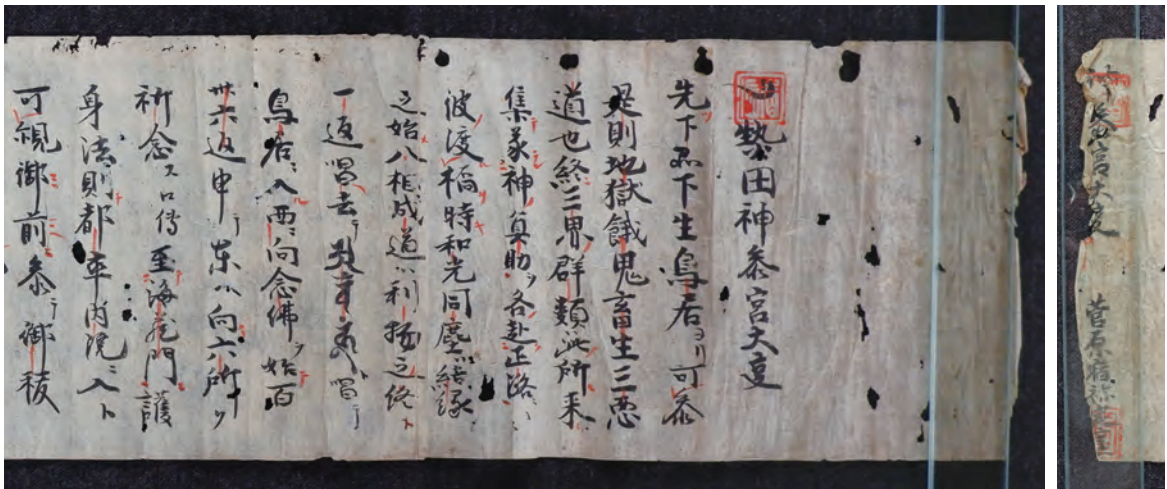
青アラニキテ和（和）弊（幣）
白（和）
白（幣）

大永六年丙卯月念六（目）

熱田

權大二僧祇良泉法印許之

五 熱田神參宮大事



五 熱田神參宮大事

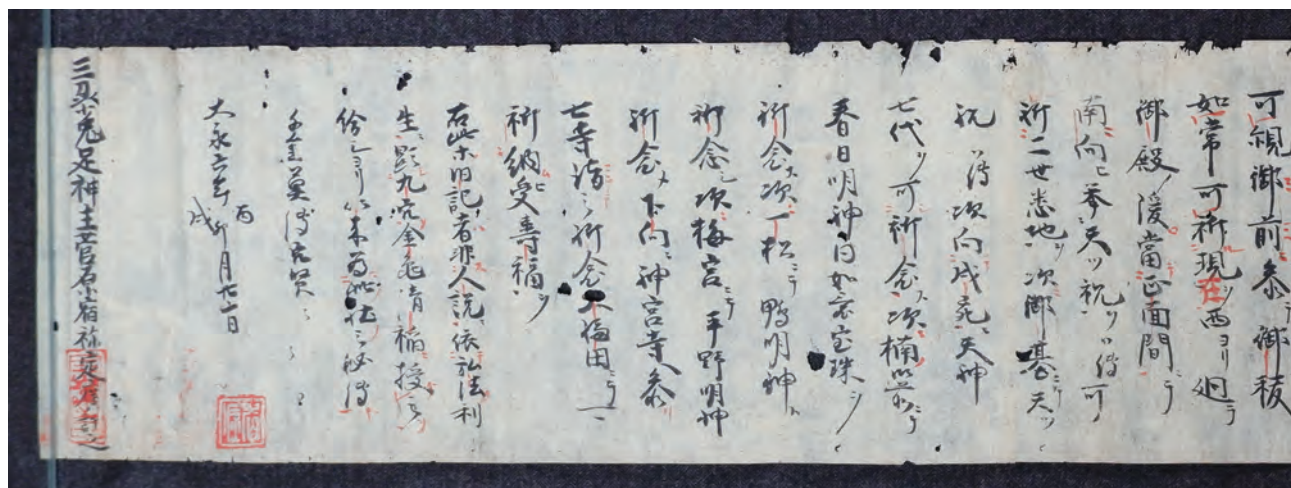
神參宮大事_中 菅原宿祢定広

「端裏

庵熱田神參宮大事

「内題

先_ツ下_一品下_一生鳥_一居_{ヨリ}可_レ參、
 是_一則_一、地_一獄餓鬼畜_一生_三惡_二
 道也。終_ニ三_一界_ノ群_ノ類_ハ、此_ノ所_ニ来_一
 集_テ蒙_{ラン}神_ノ冥_一助_ヲ。各_ノ赴_ク正_ニ路_ニ云々。
 彼_ノ渡_{レル}橋_ヲ時_キ、和_一光同_一塵_ハ結_一縁_一
 之_一始_一、八_一相成_一道_ハ利_一物_ノ之_一終_一、
 一_一返唱_ヘ去_テ、**ヲ**_ト唱_テ
 鳥_一居_ニ入_ル。西_ニ向_一、念_一仏_ヲ始_テ百
 卅_一六_一返申_テ、東_ヘ向_イ六_一所_ヲ
 祈_一念_ス口伝。至_ニ海_一蔵_一門_ニ護
 身_一法_一、則_チ都_一卒_一内_一院_ニ入_ト
 可_レ視。御前_ニ參_テ御_一被_一



如常。可^レ祈^ニ現^ラ在^一。西ヨリ廻^テ

御殿ノ後、当^ニ正^ニ面^一間^ニ、

南向^ニ、挙^ニ天^ツ祝^一ヲ、可^レ

祈^ニ二世悉地^一ヲ。次^ニ、御墓^ニ天^ツ

祝^日伝。次、向^ニ戌^ニ亥^ニ、天神

七代可^ニ祈^一念^ス。次^ニ楠^ノ御前^ニテ、

春日明神、同如意宝珠^ヲ

祈^一念^ス。次^ニ、一^一松^ニ鴨明神^ト

祈^一念^シ、次^ニ、梅宮^ニ平野明神

祈^一念^シテ、下^一向^ニ神宮寺^ヘ参^リ

七寺詣^{マウテ}之祈^一念、大^マ福^フ田^ニ可^ク

祈^一納^ム受^ヒ寿^フ福^ヲ。

右此等ノ旧^ハ記者、非^ニ人^一説^ニ。依^テ弘^ニ法^一ノ利

生^ニ頭^シ九^一穴^一ヲ、金^一龜^一、清^一稻^ニ授^レ之^一ヲ

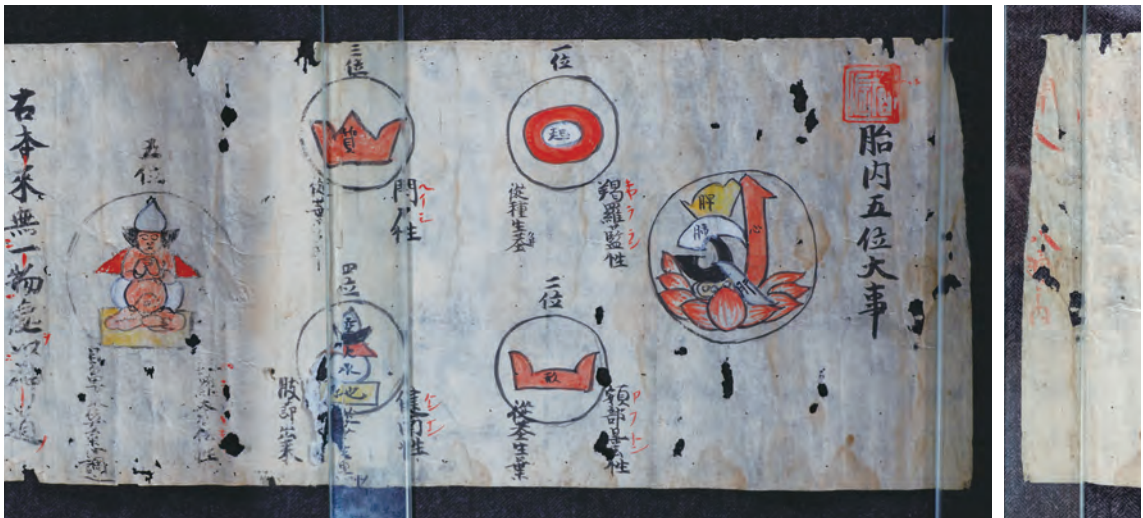
給^シヨリ以來、為^ニ此^ノ社^ノ之秘^ノ伝^一。

千金莫^レ伝、穴^ニ賢^ニ云^フ。

大永六年^{丙戌}卯月廿二日

三州菟足神主菅原宿祢定広許之

六 胎内五位大事



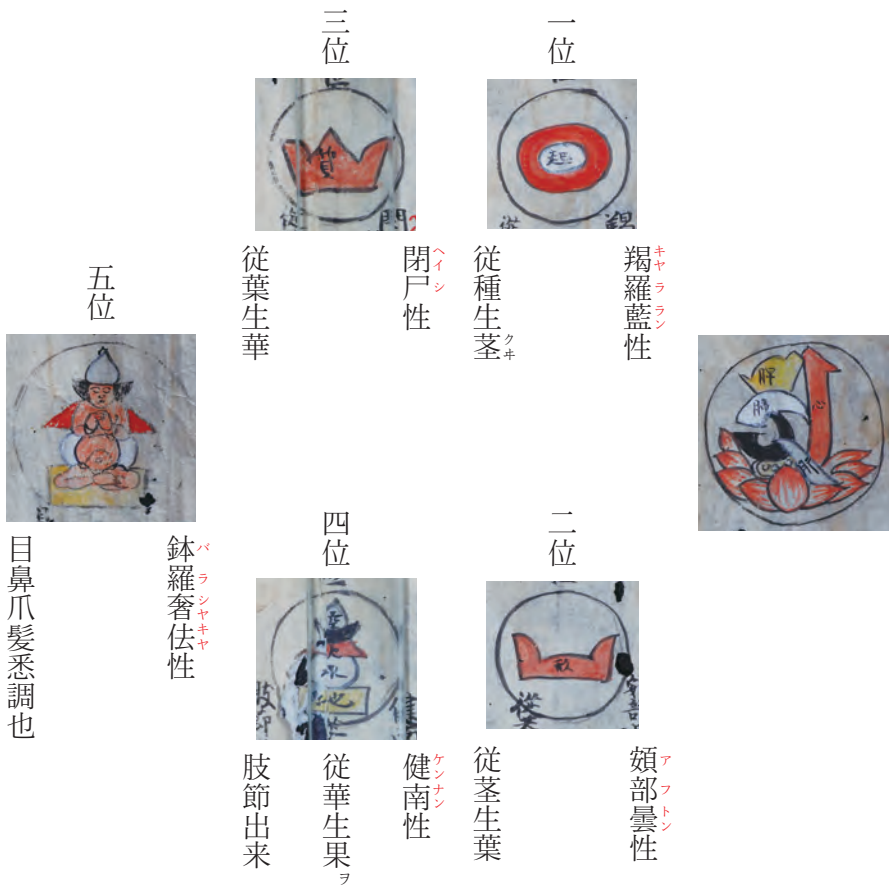
六 胎内五位大事

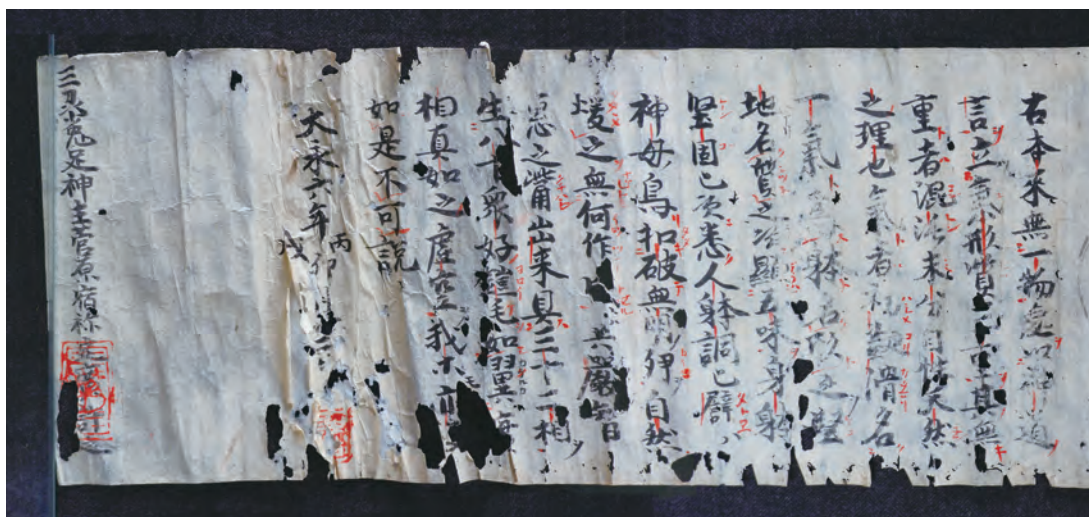
開人 八通之内

「端裏

胎内五位大事

「内題



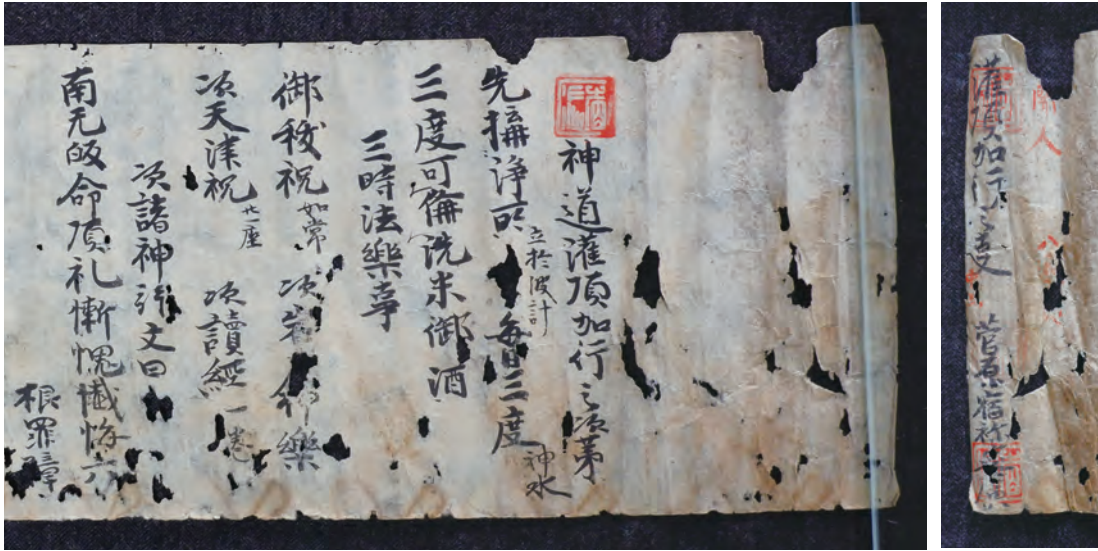


右、本_ニ来_レ無_二一_一物_一處_ヲ、以_二神_一道_ノ
 言_ヲ、立_二氣_一形_ニ質_三重_一、其_ノ無_キ
 重_ト者、混_二沌_一未_レ分_、自_レ性_ニ天_一然_ネ
 之_ノ理_也、氣_ト者、初_ニ凝_一滑_、名_ニ
 一_一氣_ト、為_レ躰_ト、名_レ形_レ之_ヲ、堅_{ケン}
 地_ナリ、名_レ質_レ之_ヲ、次_ニ顯_一五_ニ味_一、身_ニ躰_ヲ
 堅_{ケン}固_ゴ也、次_ニ悉_一人_ニ躰_一調_ト也、譬_ハ
 神_ニ母_一鳥_リ、扣_タ破_キ無_二明_一卵_ヲ、自_レ然_ニ
 暖_ア之_ヲ、無_二何_一作_レ成_{トハ}、共_ニ嚴_一智_ニ
 惠_ケ之_ヲ、出_レ来_、具_ニ三_一十二_ニ相_一、
 生_ス八_ニ十_一衆_ノ好_ノ鎧_一毛_ヲ、如_レ翼_ニ實_一
 相_ニ真_一如_レ之_ノ虛_一空_ヲ、我_レ等_モ亦_□
 如_レ是_、不_レ可_レ説_云、
 大永六年_{丙戌}卯月廿二日

三州菟足神主菅原宿禰定広許之

七

神道灌頂加行之次第



七

神道灌頂加行之次第

開人 八通□内

灌頂加行之事^中菅原宿禰定広

「端裏

神道灌頂加行之次第

「内題

先構^二淨所^一_{立於波計}、毎日三度^{神水}、

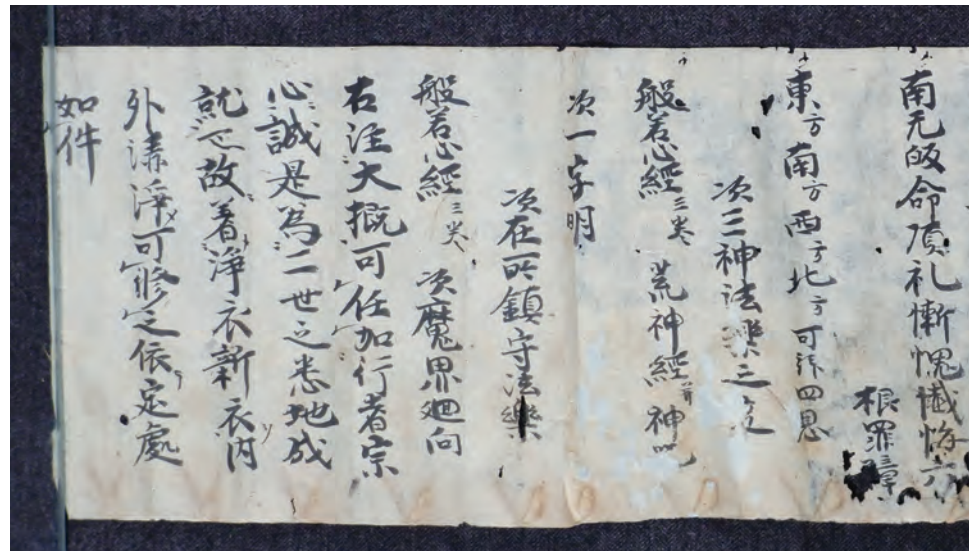
三度、可^レ備^レ洗米御酒^二、

三時法樂事

御枝祝^{如常}、次岩[□]神樂、

次天津祝^{廿一座}、次読經^{一卷}、

次諸神拜文曰、



南无皈命頂礼、慚愧懺悔六

根罪障、

東方南方西方北方可拜四恩

次三神法樂之事

般若心經^{三卷}、荒神經并神呪、

次一字明、

次在所鎮守法樂、

般若心經^{三卷}、次魔界廻向、

右注^二大概^一、可^レ任^レ加^二行者宗

心^三、誠是、為^二二世之悉地成

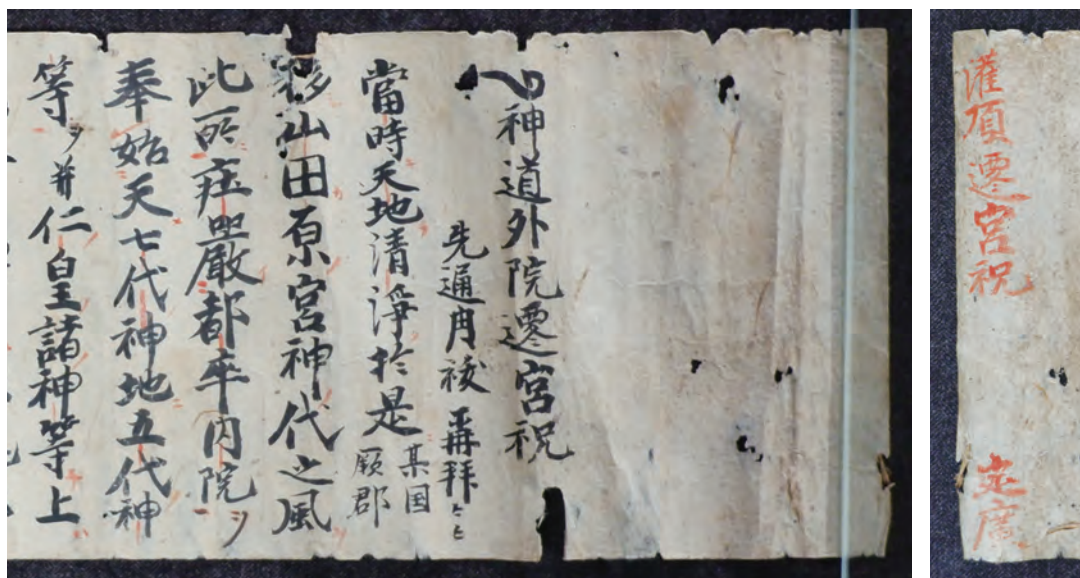
就^一也、故^ニ着^{シテ}淨衣新衣^一、内

外清淨^{シテ}、可^レ修^レ之、依^テ定處

如^レ件、

八

神道外院遷宮祝



八

神道外院遷宮祝

灌頂遷宮祝 定広

「外題

庵神道外院遷宮祝

「内題

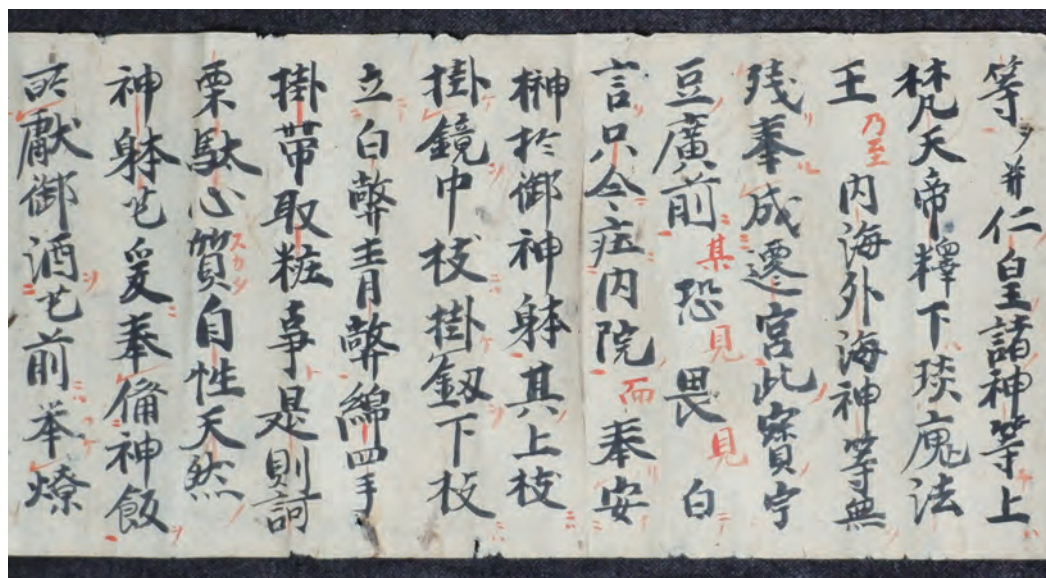
先通再祓 再拝々々

当_レ時_キ天_チ地_チ清_ク淨_ク、於是_ニ
某国
殿郡

移_シ山_カ田_カ原_ノ宮神_ノ代_ノ之風_ヲ、

此所_ニ莊_イ嚴_ニ都_ノ卒内_ノ院_ヲ、

奉_レ始_ニ天_メ七_代ノ神地_ニ五_代ノ神_ノ



等^一、并仁^ノ皇^ノ諸^ノ神^ノ等^一、上^ハ

梵^一天帝^一釈^一、下^ハ琰魔法^一

王^一、^{乃至}内^一海外^一海神^一等^一、無^ク

殘^レ奉^レ成^三遷^一宮^二此^ノ宝^ノ宇^一

豆^ノ広前^一、^某恐^見畏^見白^テ

言^ク、只^一今^マ莊^二内院^一而^一、奉^レ安^二

神^一於^レ御神^一、其^ノ上^ニ枝^ニハ

掛^レ鏡^ヲ、中^ニ枝^ニハ掛^レ鏡^ヲ、下^ニ枝^ニハ

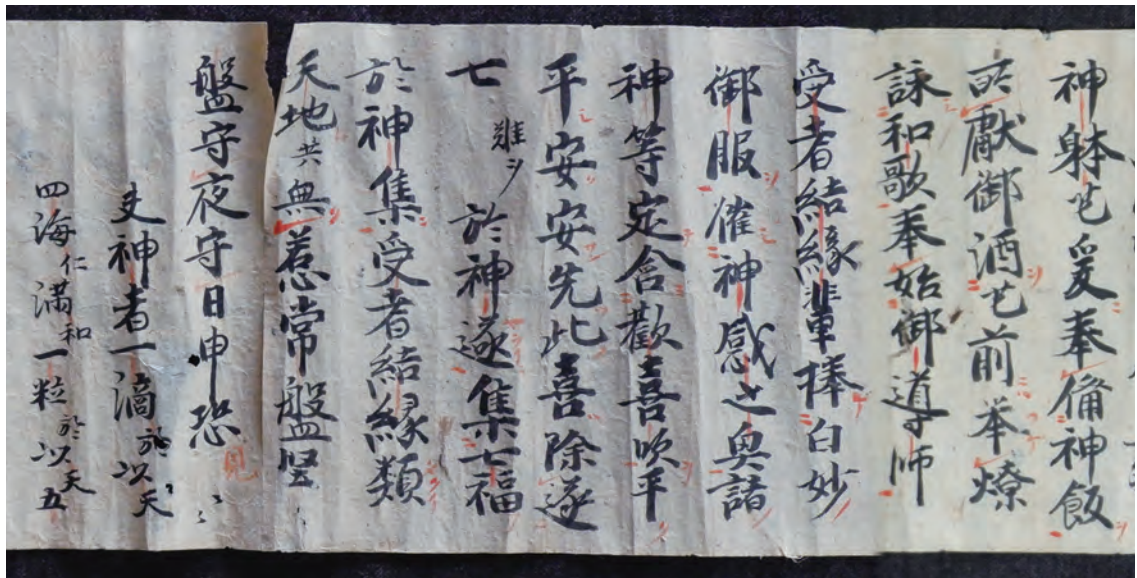
立^二白^一弊^一青^一弊^一、綿^一四^一手^一

掛^一帶^一取^一粧^一事^一、是^一則^一、訶^一

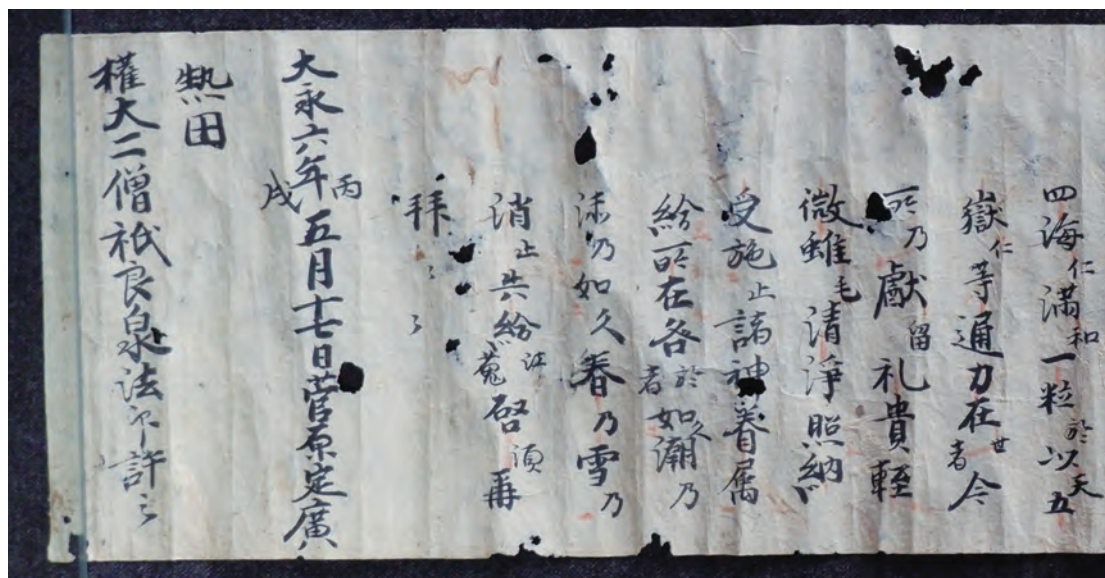
栗^一駄^一心^ス質^カ、自^一性^一天^一然^一

神^一、也^一、爰^ニ奉^レ備^二神^一飯^一

所^レ獻^二御酒^一也^一、前^ニハ^カ舉^レ燎^一、



詠^シ和^一歌^一、奉^レ始^二御^一導^一師^一、
 受^一者結^一緣^一輩^一、捧^ニ白^一妙^ノ、
 御^一服^一、催^ニ神^一感^一之^一興^一、諸^ノ、
 神^一等定^テ含^ニ歡^一喜^一咲^一、平^ク、
 平^シ安^ク安^{サン}、先^ツ此^ノ喜^ハ、除^レ遂^二
 七^難於^ヲ神^一遂^一、集^ニ七^一福^ノ、
 於^一神^一集^一、受^一者結^一緣^一類^{タケイ}、
 天^一地^{ト共}無^レ惹^一、常^一盤^一堅^一、
 盤^一、守^レ夜^一守^レ日^一申^一恐^見、
 夫^一神^一者、一^一滴^一於^以天^天、
 四^一海^仁滿^和、一^一粒^一於^以天^天五^一、



嶽^仁、等^レ通力^レ在^世、今
 所^乃獻^留礼^貴、輕^ル
 微^雖毛、清^淨照^シ納^一
 受^施止^二諸神^一眷^屬
 給^エ、所^ヲ在^ル各^於如^久潮^乃
 滿^乃、如^久春^乃雪^乃
 消^止失^給江^須啓^再
 拜々々、

大永六年^{丙戌}五月十七日菅原定広

熱田

権大ニ僧祇良泉法印許之

【解題】熱田宮神道灌頂大事等八通 熱田宮神道灌頂の輪郭

ここに紹介する八通の切紙は、熱田宮への参詣の大事（秘伝）をはじめ、神社祭祀特有の「神目繩」や「酒」、さらには神道灌頂の前段階で修せられる「加行」の作法や秘説の伝授に用いられ、授与された神道資料である。その全体が、中世の熱田宮に参詣することをもって神祇の灌頂とする秘伝の伝授を目的としたものと判断し、「熱田宮神道灌頂大事」と総称する。

八通はいずれも縦一六・二（四cm）、および一四・二（五・八cm）の小型の卷子本（軸のない継紙）からなり、伝授の時期は大永三年（一五二三）と六年（一五二六）の二度にわたる。このうち、端裏に朱筆で「八通之内」と書かれる二通は、どちらも大永六年の記を持つ。この「八通」が調査を行った切紙の点数と一致すること、また奥書のない一通を除きみな「熱田」の「良泉法印」から伝授されたものであることから、大永六年の段階で、これら八通を一具とする現行の形を整え、継承されたものと推察される。

熱田宮は、神仏習合の長い伝統を有し、神宮寺を中心に、天台真言の諸寺院を構えて、社僧らが仏教による神祇祭祀をつかさどる場であった。院政期には神祇の講式としては最古の『熱田大明神講式』（高野山金剛三昧院蔵）が成立し、鎌倉時代には顕密仏教の側から熱田の神祇の秘説を体系化した書物も誕生する。そうした歴史を背景として、熱田の社頭と全国の霊地をつなぐ秘伝として成立したのが、『熱田宮秘釈見聞』（南北朝時代写、大須観音真福寺蔵）である。それらの要素を含み込み、室町時代には天台真言の祖師に託して熱田の秘説を体系化した『熱田太神宮秘密百録』も編まれた¹。それはちょうど神道灌頂の儀礼を介して神道の流派が誕生する時期と軌を一にし、『神祇秘記』（十六世紀中頃までには成立、大須観音真福寺蔵）は、神道十二流のうちの一つに「熱田素戔尾流」があったことを伝えている²。菟足神社の神道灌頂大事等八通は、この「熱田素戔尾流」の実態を照らし出す可能性を秘めた資料なのである。

試みに、これら八通と同時代に伝授された、熱田宮の神道資料を尋ねてみると、まず注目される資料に、密蔵院（春日井市、一時、熱田神宮寺の本

寺となっていた）に伝わる『宗廟神社祓神事』³がある。本資料は、大永三（一五二三）年二月に、熱田座主憲信から憲宗へ伝授された切紙（縦一五・七cm、横五一・九cm）である。内容は、宗廟神と社祓神とは何であるのかを仏教の側から説明する秘説であるが、「能々可智^レ尋明師^レ者」と記した上で、「仍開壇授者、唯授一人^二大事也^一」として、壇を設けて唯一人に伝授する秘説であることが明記されていることから、明らかに神道灌頂の儀礼を介して授与された切紙であったことがわかる。ちなみに、このとき伝授の師をつとめた憲信は、天文二十年（一五五二）十一月に、熱田宮の内院で社僧が勤行するときに用いる『太神宮内院法則』⁴を著している。また、『張州雜志』巻三十七には、大永三年（一五二三）二月に熱田（如法院）の座主であった権大僧都良信が授与した『御遷宮次第』⁵と、永禄六年（一五六三）七月に大岸憲宗が良信に授与した『熱田七社御遷宮大事』⁶が収められている。両書に見える良信が同じ人物かはわからないが、熱田の座主をつとめた良信は、永正九年（一五〇九）に真福寺蔵室町時代写本と同内容の『熱田講式』⁷を書写していたことが、『塩尻』巻九十一に抜粋された本文から知られている。

これらの資料からは、菟足神社の神道灌頂大事等八通が伝授された当时に、熱田宮において、座主が自ら熱田宮の参詣作法や遷宮次第、さらには縁起や講式などの儀礼を積極的に整え、秘事口伝を体系化し伝授する営みをうかがうことができる。それらの秘事口伝が、熱田の社僧のみならず、地方の拠点となる神社の神主にも授けられ、展開した消息を示すのが、菟足神社の神道資料といえるだろう。その特色は、第一にそれが同一人の授けた体系的な伝授であること、第二に熱田宮の縁起や社参作法に根ざすこと、第三に同時代に集中的な展開が想定できることにある。

まず指摘されるのは、八通がみな「熱田権大二僧祇良泉法印」を伝授者とするものである。神道灌頂の際、伝授の師となる阿闍梨が自らを「神道阿闍梨」「神祇阿闍梨」「両部阿闍梨」「神道密教兼学阿闍梨」などと称したことは知られているが、「権大二僧祇」という称号は、寡聞にして他に例を知らない。熱田独自の称号であろうか。神道灌頂を行うための職位として、「権大僧都」と「神祇」を組み合わせ作られたものと推測されるが、

1 八通（巻）の神道切紙

権大ニ僧祇というからには、権大一僧祇、権大三僧祇といった位もあったか。そうした称号が、大永三年から六年の段階で、熱田宮において用いられていたことは興味深い。

一方、受者は「森家」「安久」「菟足神社神主菅原宿禰定広」の三名である。このうち「森家」「安久」は、姓ではなく名であろう。書写の筆跡は、これら三名によって異なる。また、「森家」「安久」の切紙に朱筆は施されていないが、「定広」のものには朱による訓の書き入れが多く施されている。密教をはじめ神道の伝授の場では、とりわけ訓は口伝として重んじられ、特に朱で書き入れられた。「定広」の伝授資料に施された多くの朱筆は、そうした伝授の営みを如実に伝えるものである。「定広」は神主としての地位を明記して、特に多くの口伝を授かっている。熱田の神道伝授を授かることで、菟足神社は熱田流の儀礼作法を伝える場として、地域社会における権威を高めたものではなかったか。

次に、これらの灌頂の儀礼を介して伝授された秘説が、熱田宮独自の社参作法や縁起、秘説に根ざしていることにも注目したい。たとえば、「神目縄大事」では、法楽として詠じられる和歌（此神目ハタカ曳シメッ尾割ナル 劔ノ宮ノキネカナイシメ）に、尾張国熱田の八劔宮が歌い込まれてい



る。さらに、『熱田神参宮大事』の本文を見てみよう。「下品下生鳥居」に始まる参詣の意義について、それは三界の群類が神の救済を蒙るためであり正路に赴く儀であると説くところは、『熱田講式』（大須観音真福寺蔵）第三段廻向の詞と呼応している。

『熱田神参宮大事』

先^ウ下^下品下生鳥居^{ヨリ}可^レ参^参、是則、地獄餓鬼畜生三惡道也。終^ニ三界ノ群類ハ、此ノ所^ニ来^リ集^テ蒙^シ神ノ冥助^ヲ。各^ノ赴^ク正路^ニ云々。彼ノ渡^レ橋^ヲ時キ、和光同塵^ハ結縁之始^ハ、八相成^リ道^ノ利物之終^ハ、一返唱^ヘ去^テ、^ヲ唱^テ鳥居^ニ入^ル。西^ニ向^シ、念^ハ仏^ヲ始^テ百卅六返申^テ、東^ヘ向^シ六^ノ所^ヲ念^ス口伝。至^テ海蔵門^ニ護身法、則^チ都^ニ卒^ニ内院^ニ入^リ可^レ視^視。

『熱田講式』

故^レ称^ニ都卒内院^一、豈^九所鳥居者^非三九品浄土^ニ哉、終^ニ一切衆生者、悉^ニ渡^ニ裁^斷橋^一、於^ニ下品下生鳥居^ニ来^リ集^テ、而^{シテ}蒙^シ神之冥助^一、各^ノ赴^ク正路^ニ上^リ。

裁断橋を渡るときに唱える「和光同塵結縁始」の偈（点線部）も、『熱田講式』冒頭に次のように掲げられており、それは神仏習合の神の救済を象徴する偈文であった。

『熱田講式』

和光同塵結縁始、八相成道利物終、帰命頂礼天照太神宮^{王子眷}属^ニ返^ス

このようにして、裁断橋を渡り、鳥居のもとに集い、熱田宮の外院から内院へと参るとき、その境界を成す門が「海蔵門」であった。そこから内院に入る儀は、「都卒内院」に入ると同義である。その社前に参り、御秋えを受けて祈願する作法は、『熱田太神宮秘密百録』（以下『秘密百録』と略称⁹）に「社参次第」として掲げられる作法と共通する。

『熱田神参宮大事』

御前^{ミマヘ}ニ参^マテ御^ミ秋^{アキ}如^レ常^ニ。可^レ祈^ル現^ニ在^一。

西ヨリ廻テ御殿ノ後、当ニ正ニ面ニ間ニテ、南ニ向ヒ、拳ニ天ヲ祝フ可レ、可レ祈ニ二世
悉地^一ヲ。

次ニ、御墓ニテ天ヲ祝フ可レ。次、向ニ戌ノ亥ニ、天神七代ヲ可レ祈念ス。

『秘密百録』

扱宝殿ニ奉テ向ヒ、正面ニテ法味ヲ可レ捧也、

次西ノ廻テ御殿ノ後ニテ、正面ニ当リタル門計イテ、南向ニシテ祈念可レ申、神ハ御誓御座
ス故、北向ニ御座ス也、

次ニ、御殿ヨリ北戌^{戌多}宛ニ寄テ、御墓一有リ、合ニ、一ハ天神七代ノ御有処ト云説ナ
リ、一ハ出雲ノ国氷ノ河ニテ、素盞鳴尊切給ヒシ大蛇ノ御舍利ヲ埋メ給御塚トモ云也、
此五輪ニ付テ多ク異説有、誠ヲ書頭事不レ可有、口伝可レナリ有、

また、楠、松、梅の霊木を春日、鴨、平野の神として祈念する作法も、
『秘密百録』「社参次第」の冒頭に掲げられていた。

『熱田神参宮大事』

次ニ楠ノ御前ニテ、春日明神、同如意宝珠ヲ祈念ス。

次ニ、一ハ松ニテ鴨明神ト祈念シ、

次ニ、梅宮ニテ平野明神祈念シテ、

『秘密百録』

一、社参次第、先海蔵門ヨリ可レ参、四面八町内^{ニスク}ニシテ、諸木可レ有ニ八十
八一本也、八十八社神也、一番^ハ字ヲ八十八返唱テ可レ法樂ス、次霊木^{鴨イ}三本在
レ之、

一ハ西ノ方屋ノ前ニ松有、鴨大明神、

一ハ楠ノ木御前、春日大明神也、

一ハ海蔵門東方脇ノ梅木アリ、松尾ノ大明神也、礼拝テ可レ申、¹⁰

これらの祈念を経て、『熱田神参宮大事』は、下向の時に神宮寺へ参り、
「七寺詣」の祈念を捧げて「大福田」に寿福を祈る作法を説く。神宮寺の
参拝作法としての「七寺詣」の神話の起源について、『熱田宮秘釈見聞』
や『秘密百録』は、次のように記す。

『熱田宮秘釈見聞』

神宮寺ニ七寺詣テト云者、大明神七度天降給立給ヘル寺也、七度皆薬師仏ト
現シ給フ、然則七仏薬師ト号ス、

『秘密百録』(熱田太神宮御縁起秘伝百録第下巻)

大明神先祖ニ此処ニ七度天降リ、寺ヲ立給ヒ、七仏薬師也、今ノ神宮寺是ナリ、当
社ニ正月一日七寺詣ト云ハ此寺参ノ謂ナリ。

「大福田」は、中世には神宮寺に合祀されており、熱田宮古絵図(写真
2)には、神宮寺の堂内に、本尊薬師(中央)、大黒天(右)と並んで大福
田の社(左)が描かれているのを見ることが出来る。¹¹

『熱田神参宮大事』は最後に、これらの「旧記」は「人説」に非ずとし
て、「弘法(興法)利生」のために九穴を顕し、「金亀」から尾張清稻が授
かって以来、熱田宮に秘伝として伝えられてきたものであることを明かす。
そうした秘説の根ざす拠り所も、中世熱田宮の縁起にあった。例えば、清
稻以来の秘伝として継承された「旧記」との表現は、『尾張国熱田大神宮
縁起¹²』が「神宮ノ別当正六位上尾張ノ連清稻」の古記をもとに寛平二年に
献上されたとの由緒を持つことに通じる。縁起や秘説の継承者としての清
稻の役割が用いられているといえよう。『秘密百録』には、「権宮司清稻」
が、弘法大師と伝教大師の両祖師を舞殿に請じて七日問答し、あるいは神
明の奇瑞を受けて熱田を中心とする世界観を伝える伝達者としての役割も
見ることが出来る。¹³ また「九穴」や「金亀」とは、『熱田講式』(第三段廻
向)に熱田宮を「九穴金亀住所」と説くことをはじめ、『熱田宮秘釈見聞』
『秘密百録』『熱田の深秘』において、八葉九尊の蓮台に住まい宮を金亀の
上に構え、地底を通る八穴を通じて富士山の人穴や伊勢大神宮、高野奥の
院、白山山頂や諏訪の南宮、天竺の無熱池と結ばれた、熱田大明神の世界
像を象徴する鍵語であった。

こうした『熱田神参宮大事』を含む菟足神社の八通の伝授資料の持つ特
色として、更に重要なのは、これら八通と同時代の熱田宮と関わる伝授資
料を相互に参照することによって、全体がより大きな儀礼の体系を示唆す



2 神宮寺と大福田社

熱田宮古絵図のうち、神宮寺の部分。
堂内中央に本尊（薬師）、右に大黒天、
左に大福田社が示されている。
（画像提供：熱田神宮）



ることにある。前述したように、同じ大永三年の記をもつ伝授資料に、座主憲信による『宗廟神社禊神事』（密厳院文書、後掲参考資料①）、および『張州雜志』（卷三十七）に収録される、『御遷宮次第』がある（参考資料②）。このうち、座主良信の名を記す『御遷宮次第』は、菟足神社の八通のうち『神道灌頂加行の次第』の作法を考える上で、改めて注目される。

『神道灌頂加行の次第』は、神道灌頂の前段階で行われる加行の作法として、まず「浄所」を構え、そこに「於波計（オハケ）」を立てて、毎日三度の神水と、洗米と御酒を供え、「三時法楽」に御祓祝、岩戸神楽、天津祝、読経等を行い、「三神法楽」ののち「在所鎮守法楽」を行う次第が示されている。その次第は、『御遷宮之次第』において、最初に「精進屋」を構えて「遠波計（オハケ）」を立て、「祓師」を定めて、毎日三度新たに洗米し御酒を捧げ、祓えののち、法施を奉るという、遷宮の前の加行作法と共通する。

これにより、神道灌頂の加行を行う「浄所」が、「精進屋」にあたることが知られるだけでなく、両者の呼応は、加行を経て灌頂壇に諸神を勧請し灌頂儀礼を行うに際して営まれる諸神勧請の次第が、『御遷宮之次第』における神体の移座（つまり神の勧請）の作法を踏まえ、それに則っていたであろうことをうかがわせる。

菟足神社の八通のうち、そうした神体の移座と関わるのが、「神道外院遷宮祝」であった。そこには、「山田^カ原ノ宮神ノ代之風^フ」つまり伊勢の外宮の風儀を伝える灌頂の道場に、「都卒内院」である熱田宮を荘厳し、天照大明神をはじめ諸神を残り無く遷して、御櫛に神体を安置し、神飯を供え御酒を献じ、燎^{にわび}を挙げて和歌を詠ずる作法が説かれている。それは、同じ八通のうちに『神祇灌頂酒印信』が含まれ、和歌が掲げられていることも関わろう。これらの作法を経て、熱田宮の内院を荘厳し、熱田神と伊勢の神々をはじめ諸神が集う宝前で、岩戸神楽を行い、法楽を捧げて灌頂儀礼を執り行い、御導師をはじめ結縁の受者の集う神道灌頂の空間が、熱田宮の外院として形作られたのである。

このような場が、熱田周辺の顕密寺院から離れ、例えば菟足神社のような地方で営まれたものかどうかは明らかでないが、熱田内院に座す神々を

灌頂壇に移座すれば、熱田宮と地方の神社は内院と外院の関係において結ばれ、一体の儀礼空間が具現するだろう。そうした場を介し、熱田の秘説の伝授相承が盛んに行われたと察せられる時期が、大永三年から六年のころであった。

以上のように、菟足神社の熱田宮神道灌頂大事八通は、中世熱田宮の縁起や社参作法の秘説に根ざし、神道灌頂という伝授を介して地方へ伝播する様相を如実に伝えるものであった。それは、熱田宮座主のもとで縁起説や法則、神道灌頂を含む儀礼体系が整えられ、伝授を介し地域社会へと浸透していく様相を具体的に知ることができる点において意義深い。以下に八通の書誌を古い順に列記し、備考に関連する資料を注記する。なお、八通のうち五通には、書名や署名に朱印が押されている。¹⁶ (阿部美香)

注

- 1 阿部泰郎「熱田宮の縁起―とはずがたり」の縁起語りから」『国文学解釈と鑑賞』六三巻一二号、一九九八年、同「中世熱田宮の宗教世界―熱田をめぐる宗教テクストの諸相」(『中世日本の宗教テクスト体系』二〇一三年、初出は『神道史研究』五八巻二号、二〇一〇年)。国文学研究資料館編『中世日本紀集』真福寺善本叢刊七(臨川書店、一九九九年)、阿部泰郎解題参照。
- 2 六四乙箱八号。大東敬明氏、伊藤聡氏の御教示による。
- 3 「宗廟神社祓禊事」は、『愛知県史 資料編一〇 中世三』(資料番号九六九)、熱田神宮宮庁編『熱田神宮文書 熱田社僧関係文書』(二〇一七年)に「宗廟神社祓禊事ノ覚書」として収録、同解題参照。
- 4 前掲注3『熱田神宮文書 熱田社僧関係文書』に収録、同解題参照。
- 5 愛知県郷土資料刊行会『張州雜志』第四(一九七五年)所収。翻刻は、熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 造宮遷宮編』上巻(一九八〇年)、前掲注3『愛知県史』(資料番号九七〇)に所収。
- 6 前掲注5『熱田神宮史料 造宮遷宮編』に収録、同解題参照。
- 7 神道大系編纂会『神道大系 神社編十九 熱田』(一九九〇年)所収、「熱田講式」解説参照。
- 8 引用本文は、前掲注1『中世日本紀集』に拠る。
- 9 引用本文は、熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒編』(二〇〇二年)に拠る。

10 その一方で、八十八本の霊木および楠、梅、松について、「熱田太神宮御縁起秘伝百録第下巻」に、「一夜ノ中ニ八十八本ノ霊木漏出ス、諸神遊行ノ木也、大宮ノ御前ニ楠本ハ、天神七代地神五代、表木也、此木ノ本ニシテ二季ノ御祭在リ之」(「当社之中ノ木ニ、楠之木ハ賀茂大明神木也、右之上中門之脇之松ハ春日大明神木也、毎水門之脇ノ梅ハ平野大明神之木也」)(前掲注9『熱田神宮史料 縁起由緒編』五七、五九頁)との説も記している。

11 七寺詣は、毎年正月一日に行われた熱田宮の年中行事として『熱田雜記』卷三木津山神宮寺記聞(『熱田神宮史料 縁起由緒編二』(二〇〇九年))には、七所を「大宮、薬師、神宮寺、西三味堂、帝釈天祠、東三味堂、政宮」と記す。また『熱田神社問答雜録』(前掲注7『神道大系 神社編十九 熱田』)には、「神宮寺」の頭注として、「宮寺正月元日古ヘ七所ノ拝トテ、神宮寺ト帝釈天ト西ノ小塚ト弁才天ト小塚ト、大喜ノ大日ヲ拝シテ大宮ヲ遙拝セシ、コレ供僧家ノコトナリ」と記している。

12 尾崎知光「尾張国熱田太神宮縁起について」『説林』一五号、一九六七年)、阿部泰郎「『日本紀』という運動」『国文学解釈と鑑賞』(六三巻三号、一九九九年)。

13 前掲注9『熱田神宮史料 縁起由緒編』四〇〜四五頁。

14 いずれも前掲注9『熱田神宮史料 縁起由緒編』、および注7『神道大系 神社編十九 熱田』に収録。

15 霊地参詣の作法として精進屋にオハケを設けることについて、水谷類「霊地参詣のオハケ―精進儀礼の見直しから」(西海賢二編『山岳信仰と村落社会』岩田書院、二〇一二年)に詳論されている。それが神道灌頂の作法にも用いられることは興味深い。

16 朱印には、次の二種類がある。

イ印 朱角陰印(首尾に押す)



ロ印 朱方角陽印(奥書の定広署名に押す)



熱田宮神道灌頂大事八通を朱印の有無により区分すれば、次のようになる。
○印記の無いもの。

『讓神代事』『神目繩大事』『神道外院遷宮祝』の三通。

○イ印を端裏外題上、その下の署名、内題上、末尾の識語下、ロ印を奥書定広署名に押すもの。

『熱田神參宮大事』

○イ印を、端裏外題上、その下の署名、内題上に押すもの。

『神道灌頂加行之次第』（奥書欠か）

○イ印を、内題上、末尾の識語下、ロ印を奥書定広署名に押すもの。

『神祇灌頂酒印信』『仏神異之名事』『胎内五位大事』

〔参考資料①〕宗廟神社祓神事（密厳院文書、『熱田神宮文書 熱田社僧關係文書』

（裏書）「宗廟 憲信」

宗廟神社祓神事

右、宗廟者、仏神仮現ニ王孫ト、利シ衆生ヲ給フ、名之曰ニ性徳神ト、社祓者、始ニ臣下ヲ其外之衆生、依リ行ニ随ヒ願ニ、其精極為ニ慮相ヲ、名之曰ニ修徳神ト、其神云者無レ形、亦依レ顯ニ威徳ヲ、賢哲モ無ニカ見事ニ故、就迷レ之安レ之、四時階ニ寒暑ヲ、化物ニ是懸レ眼ニ一陰一陽ニ窺レ天鑑レ地ヲ、蓋庸愚モ不レ識ニ其端一哉、口決曰、称神曰ニ金剛正鉢ト如何者、无レ始无レ終、常住不變、打トモ不レ碎、火ニモ不レ燒、水ニモ不レ埋、自由自在ニ住ニ法界内院ニ至於レ之者、无レ邪モ正モ、只知与不レ知也、能々可レ智ルレ尋明師ニ者也、仍開壇ノ授者唯授ニ一人ニ大事也、穴賢々々
大永三三 二月吉日

授与憲宗

〔参考資料②〕御遷宮之次第（『張州雜志』三十七卷所収）

御遷宮之次第

新祝詞

口伝在レ之

新宣命

先ッ構ニ精進屋ヲ、撰ニ定吉一日ヲ前七箇日遠波計於多天、役者ノ分悉ク令ニ參籠ニ、定ニ秋師ヲ毎日三度捧新御酒ヲ献ニ華米ヲ、御秋如常、同総衆等ニ法

施主人檀方在所可レ奉レ祈ニ息災ヲ者也、
一、至ニ時日一自ニ飯殿ニ神灰ノ道本社迄良知於申以、其内ニ安良今武於之、
喜、其上ニ敷レ布、其上ニ敷レ絹、神鉢道可レ奉ニ武利也、
以レ夜可レ用時ニ、宝前燒レキ燎ヲ、湯太天在レ之、
一、奉レ備ニ供御ヲ、則総ニ礼神ニ樂在レ之、
一、明日供御同前、随在所依レ社祭祀大法会可レ尽レ之、
右、秋師若シ為ニ社僧ニ者、法衣ノ上ニ着明衣ヲ、為レ冠ニハ葉ノ蓮華ヲ覆レ面ヲ之、
太字津如常、此時役者以門礼毛一種津々可レ勤レ之者也、大概如此仁候、克々可ニ口伝ニ者也、千金莫一伝、唯授一人、穴賢々々、
大永三三 癸未二月吉日、
尾州 蓬萊座主 權大僧都良信

【書誌】

一 『讓神代事』

【書名】端裏外題「讓神代事 森家」

内題「天神七代」

【形態】写本、継紙、一卷（二紙）

【法量】一五・八cm×五六・二cm

【書写】大永三年（一五三三）

【料紙】楮紙

【本文】無界

【奥書】大永三年 癸未卯月日森家

熱田

權大二僧祇良泉法印許之

【備考】天神七代地神五代の神の系譜に、天照大神の兄弟の次第を示す。

これらは、灌頂道場に必ず勧請される神々である。特に中世の熱田は、伊勢や熊野と「一鉢分身」（『熱田宮秘積見聞』）の関係にあった。

三 『神目縄大事』

【書名】端裏外題「神目之大事」^中 安久

内題「(庵) 神目縄大事」

【形態】写本、継紙、一卷(二紙)

【法量】一四・二cm×五三・〇cm

【書写】大永三年(一五二三)

【料紙】楮紙

【本文】無界、墨(片仮名訓)

【奥書】熱田

権大二僧祇良泉法印許之

大永三年^末癸卯月吉日安久

【備考】注連縄を曳くときの作法を説く大事。法衆の和歌を載せ、急急如律令を誦す意義を示す。『日本紀三輪流』(大須観音真福寺蔵、

天文十七年『一五四八』写、国文学研究資料館編『中世日本紀集』臨

川書店、一九九九年、四八一頁)には「三重三 尻」出縄様口伝

大師撰」として、注連縄を曳く作法とともに、急急如律令を誦

す意義が説かれるが、注連縄を曳く時の対象は異なる。熱田独

自の注連縄の大事として注目される。

三 『神祇灌頂酒印信』

【書名】内題「神祇灌頂酒印信」(イ印)

【形態】写本、継紙、一卷(三紙)

【法量】一六・三cm×六二・五cm

【書写】大永六年(一五二六)

【料紙】楮紙

【本文】無界。朱(返点、片仮名訓、連読点)、墨(返点、片仮名訓)

【奥書】大永六年^丙戌卯月念一日(イ印)

三州菟足神主菅原祢定広許之(ロ印)

【備考】包紙あり。『熱田神参宮大事』とあわせ二巻を包む。「大永菅原定

四 『仏神異名之事』

【書名】内題「仏神異名之事」(イ印)

【形態】写本、継紙、一卷(二紙)

【法量】一五・〇cm×七九・六cm

【書写】大永六年(一五二六)

【料紙】楮紙

【本文】無界。墨(片仮名訓)

【奥書】大永六年^丙戌卯月念六^日□(イ印)

熱田

権大二僧祇良泉法印許之(ロ印)

【備考】神と仏に関わる用語は、名前を異にしながら本質は一つである

とする秘説。このような教義的解釈は、例えば『神道集』(南北

朝時代)「第二十六 御神楽事」の説く以下の問答に通じる。

問、仏界神道其儀式別^{ナル}似云共、実一同得心、何以得心合^ヤ、答、

神^{ニハ}宝殿、仏^{ニハ}御堂、神^{ニハ}再拝、仏^{ニハ}三礼、神^{ニハ}氷、仏^{ニハ}行水、

神^{ニハ}鈴、仏^{ニハ}鈴、神^{ニハ}懸帶、仏^{ニハ}袈裟、神^{ニハ}唐裳、仏^{ニハ}衣、神

^{ニハ}唐衣、仏^{ニハ}服衣等ナリ、神^{ニハ}百日千日七日五日三日精進、仏^{ニハ}

三年千日山籠、神^{ニハ}八町七五三、仏^{ニハ}如法経競繩、亦五智五色五

大々ノ繩、神^{ニハ}幣帛、仏^{ニハ}幡蓋、神^{ニハ}勝雄木手回草、仏^{ニハ}三宝供

養ノ布施、神^{ニハ}大小ノ被、仏^{ニハ}事理懺悔、神^{ニハ}御祭、仏^{ニハ}大法会、

神^{ニハ}八人女、仏^{ニハ}八供、神^{ニハ}五人神楽男、仏^{ニハ}五智天童、如此

得^レ心、只神明ノ級^ハ、衆生誘^テ仏道ニ引入儀式ナリ、(以下略)

五 『熱田神参宮大事』

【書名】端裏外題「神参宮大事」^中

菅原宿祢定広(上下にイ印)

弘 神道灌頂」と朱書あり。近代のものか。

神祇灌頂の場で、諸神に捧げる酒の大事を示す印信。和歌を掲げ、神飯と神水(酒)を捧げるための供具である箸、酒、瓶を三種の神器(釵、内侍所、神璽)にあて、秘説を示す。

内題「(庵) 熱田神參宮大事」(イ印)

【形態】 写本、継紙、一卷(三紙)

【法量】 一六・四 cm×八七・三 cm

【書写】 大永六年(一五二六)

【料紙】 楮紙

【本文】 無界。朱(返点、片仮名訓、連読点)、墨(返点、片仮名訓)

【奥書】 大永六年^{丙戌}卯月廿二日(イ印)

三州菟足神主菅原宿祢定広許之(ロ印)

【備考】 熱田の参詣作法とその秘伝を説く。

六 『胎内五位大事』

【書名】 端裏〔開人 八通之内〕(朱書)

内題「胎内五位大事」(イ印)

【形態】 写本、継紙、一卷(三紙)

【法量】 一六・四 cm×七二・一 cm

【書写】 大永六年(一五二六)

【料紙】 楮紙

【本文】 無界。朱(返点、片仮名訓、連読点)、墨(返点、片仮名訓)

【奥書】 大永六年^{丙戌}卯月廿二日(イ印)

三州菟足神主菅原宿祢定広許之(ロ印)

【備考】 一部補修のため裏打あり。

巻頭にア字月輪連台図(五蔵)を示し、次に胎内五位図(全て彩色)を配して身軀の境地を示す。伊藤聡特論を参照。

七 『神道灌頂加行之次第』

【書名】 端裏外題右〔開人 八通□内〕(朱書)

端裏外題「灌頂加行之事^{中三}菅原宿祢定広」(上下にイ印)

内題「神道灌頂加行之次第」(イ印)

【形態】 写本、継紙、一卷(二紙)

【法量】 一六・四 cm×五七・八 cm

【書写】 大永六年(一五二六)か

【料紙】 楮紙

【本文】 無界。墨(返点、片仮名訓)

【奥書】 無(その部分が後欠か)。

【備考】 一部補修のため裏打あり。

灌頂儀礼の前行にあたる「加行」の作法を伝える大事。「三時法楽」として二十一座の神に捧げられる「天津祝」は、熱田座主憲信が天文二十年(一五五二)に著した「太神宮内院法則」のなかで、「次天祝言^{祭壇之大事}法界平等觀念^{口決}在之」とも関わるか。また、「在所鎮守法楽」では、般若心経と魔界廻向が唱えられる。魔界廻向文は『熱田講式』(真福寺蔵)でも、和讃、般若心経を捧げる神分作法、および和歌に続けて読み上げられており、熱田の神を祀る儀礼に不可欠な要素であったことが知られる。

八 『神道外院遷宮祝』

【書名】 端裏外題〔灌頂遷宮祝 定広〕(朱書)

内題「(庵) 神道外院遷宮祝」

【形態】 写本、継紙、一卷(三紙)

【法量】 一六・二 cm×一一五・八 cm

【書写】 大永六年(一五二六)

【料紙】 楮紙

【本文】 無界。朱(返点、片仮名訓、連読点)、墨(返点、片仮名訓)

【奥書】 大永六年^{丙戌}五月十七日菅原定広

熱田

権大二僧祇良泉法印許之

【備考】 熱田宮の外院に見立てた神道灌頂の場に、天神七代地神五代をはじめとする諸神を勧請し、「御導師」が「受者結縁輩」のために再拝し祈願する「祝詞」とその秘説。袖に神軀を安置し、上枝に鏡、中枝に剣を掛け、下枝に白幣青幣を立てて飾り、神飯や御酒を献じ、燎^{にわ}を挙げて和歌を詠じ、御導師をはじめ受者結

縁の輩が白妙の御服を捧げ、神々が興を催し歎喜び咲く描写は、天の岩戸の前で、上枝に玉を懸け、中枝に鏡を懸け、下枝に青和幣、白和幣を懸けた神楽の庭〔古事記〕〔古語拾遺〕等を踏まえた熱田宮独自のもの。

中世熱田宮の神道伝授宗教テキストの諸位相

―『鈴大事』との比較から

菟足神社に伝来する熱田から菟足社の神主に伝授された一連の大事類は、解題が詳細に示すように、八通（巻）を一具とした、神道灌頂のための印信を含む伝授切紙というべき、神仏習合儀礼の所産である。現在、熱田神宮には、こうした中世に遡る神道儀礼の実態を示す資料は遺存しておらず、その点でも八巻というまとまった文献の出現は、室町時代熱田宮の宗教儀礼の内実とその諸説および体系を知る上できわめて貴重である。これと関連して、熱田とも交流のあった津島神社に伝来していた一群の中世神道伝授印信類が注目され、そのなかにも熱田宮との関係を明らかに示す『鈴大事』等三通の伝授大事類が含まれる。この機会に、これらも改めて紹介、比較しつつ、これら中世熱田宮の宗教テキストの特質とその位相や体系を考察する。

菟足神社の八巻は、大永三年の「森家」「安久」を受者とする二巻〔三〕と、大永六年の菟神社神主「菅原宿禰定広」を受者とする六巻〔三〕〔四〕の二群に大別されるが、いずれも「権大ニ僧祇」という特殊な称号を戴く「良泉」を伝授者とする、全体として神道灌頂の儀礼を各種の位相において構成する、大きなまとまりを成していると思われる。以下に、その特色と性格を簡潔に示す（配列は解題・翻刻の順序に随う）。

〔一〕『讓神代事』は、神代の神名を天照大神の兄弟まで含めて列挙し、そこに年数や五行説による注を加える、いわば神名義注テキストである。

〔三〕『神目縄大事』は、祭祀具である四目（七五三）の結方を儀礼毎に示し、法楽和歌を併せて掲げる、いわば作法故実テキストである。

〔三〕『神祇灌頂酒印信』は、灌頂印信という密教儀礼テキストの形式の許に、祭祀の献饌である酒等の供具を三種神祇に宛てその名義と和歌を示す、いわば秘伝秘儀テキストである。

〔四〕『仏神異名之事』は、神道と仏教の名目毎に共通する一組列挙して神仏一体を示す、いわば神仏名義テキストである。

〔五〕『熱田神参宮大事』は、熱田社頭への社参次第を説きつつその意義を開示し、「口伝」を指示する、いわば儀礼作法テキストである。

〔六〕『胎内五位大事』は、おそらく灌頂受者の身体を、胎内五位図を示してその各位を五蔵・五大・五味等に配当しその境地を説く、いわば図像観念テキストである。

〔七〕『神道灌頂加行之次第』は、受者の修すべき灌頂の前行の作法を、仏事修行による「法楽」として「行者」の内外清浄を実現する、いわば修行儀礼テキストである。

〔八〕『神道外院遷宮祝』は、「御導師」により「受者結縁輩」のために、灌頂を熱田の内院から外院への遷宮として、その旨趣を灌頂表白の代わりに祝詞として述べる詞章であり、いわば唱導儀礼テキストである。

以上の八巻は、題目からも「灌頂」「加行」と「参宮」「遷宮」のように仏教と神道の名目が〔四〕「仏神異名之事」に示すごとく並べて一体となつた相伝儀礼であることを表示する「印信」であり「大事」である。その性格を大別すれば、〔一〕〔四〕は神名・名目・名義等を開示する基本的な故実注釈的テキストであるが、これらも儀礼の上で何らかの役割を果たすものであったろう。〔五〕〔七〕は、神祇祭祀の各過程を灌頂の階梯とする儀礼解釈的テキストであり、神道の作法を仏教儀礼に読み替えつつ儀礼実践を遂行するための作法書である。両者に共通するのは、〔二〕や〔三〕のように儀礼のなかで和歌を詠じ、これを神のための「法楽」とする思想であり、それは〔五〕の「加行」における修法読経を「三時法楽」とするなど、儀礼全体に及んで一貫している。

また随所で神事祭祀の仏法上の意義を釈義し、時に譬喩を用いて解説するところに禪的用語を交えた顕密（天台・真言）仏教学の知識が縦横に反

映されている。

特にその基幹となる思想の表現が㊦『胎内五位大事』である。神道灌頂の受者であり加行中の行者の身体を胎内五位図を拠り処として己れの境位を観念させる、その中核となる胎内五位図は、中世密教の灌頂秘伝テクストにやはりその核心として提示される宗教図像である。更に注目されるのは、密教の灌頂壇作法では大阿闍梨の表白に相当する㊧『神道外院遷宮祝』である。その文体は表面の枠組みこそは祝詞であるが、その内実は、対句を基本とした作文による表白文そのものである。述べるところは、天神七代・地神五代（これは㊨に対応する）の諸神をはじめ「此所」に「都卒内院」を莊嚴し「山田原ノ風」を移し、内外の神々を「遷宮」する、つまり密教の諸仏神の勧請と同様の趣きを示す。この内院に神を「御神体」として奉安し、それを鏡、劍、幣等によって莊（かざ）ることで、「詞栗駄心質、自性天然ノ神体」と觀じ（ここで㊩「胎内五位大事」に呼応する）、これに酒飯を献じ（ここに㊪が対応する）、またこれを司る。「御導師」と、その許に集う「受者結縁輩」による法樂の営みがなされる（これは㊫の加行と対応する）。これにより、燎（にわ）を挙げ、和歌を詠ずる（これに㊬などの和歌が対応する）。最後に、改めて神への讃歎が説かれ、この祭祀を納受し、眷属諸神も満足して、潮の満ち、春の雪の消る如くに失せたまえ、と神送りの詞により全体を結ぶ。導師の誦唱するこの詞章には、諸大事の主な要素が悉く摂り込まれており、その声に導かれて参加した受者は仏・神に結縁を遂げ、熱田の祭祀圏の一員となることを得たのであろう。

菟足神社の神道灌頂大事類の宗教テキストとしての性格を認識するために、同じく中世の熱田関係の大事類との比較が試みられてよい。その対象として注目されるのが、津島市津島神社（津島天王社）に伝来していた、室町時代の神道伝授文献群である。これらの一部は、昭和四十年代に刊行された『津島市史』資料編に収録されており、未収録の分とあわせて「津島神社史料」として翻刻原稿が津島神社に収蔵され、その写真が愛知県史ならびに東京大学史料編纂所にも採訪されている。原本は未見であり装丁は不明であるが、切紙や小卷子の形態であったと推察される。そのなかに、熱田宮とその周辺地域の神社との、縁起説を介した神道大事の伝授切紙

（ないし卷子）の一具とらしいテキストが含まれている。参照されるのは、以下の三通である。

- 一、『鈴大事』（甲）（端裏外題・内題）「句当大夫弘秀」（端裏外題下識語）一通（印信・血脈を含む、奥書「長祿四年九月廿三日」）
- 二、『鈴大事』（乙）（端裏外題・内題）「句当大夫秀弘」（端裏外題下識語）一通（「大事」の縁起に相当する。奥書「長祿四年九月廿三日授者秀弘／伝授師権大僧都嚴海法印」）
- 三、『鈴口決』（内題）「□ 句当大夫弘秀」（端裏外題識語）一通（「大事」の口決に相当する。奥書「長祿四年九月廿三日授者弘秀／伝授師権大僧都嚴海法印」）

この三通と共に、同じく弘秀を受者とし、秀範を授与者とする長祿三年（一四六〇）二月七日付の『麗氣紀印信』（端裏外題「麗氣十八卷印信」）一通が存しており、その識語には「於尾州海西郡門真庄天王輪藏日本紀灌頂道場、麗氣十八卷印信、奉授弘秀」とあり、翌年の『鈴大事』も、伝授者こそ異なれ同様な日本紀や麗氣灌頂に連なる神道伝授の一環として授受されたものであったと思われる。

その詳細は、付載する翻刻本文を参照されたいが、以下に要を取って略述する。

一、『鈴大事』（甲）は、「仁尊」なる僧が、諸国修行の途で熱田宮の一間に参籠し、一期の間に一仏を見奉らんと祈願のところ、天童が天下り、天照大神より祈願を納受して「鈴大事」を人の善悪を問わず守護のため授けよう、と示された印と明が冒頭に示され、その末尾に「天照大神童子形熱田明神」より仁尊、更に七代を経て嚴海から弘秀へと伝授の血脈が付される。

二、『鈴大事』（乙）は、全体として（甲）の記述をより詳細に説いた上で、縁起を「北天竺和伊露羅国」より熱田明神が我朝へ天下った所を尾張国中嶋郡の鈴置の社とし、彼の社に鈴を置いた故であるとして、鈴の効能について問答を加える。その末に「鈴ノ大事ニ在之」と（甲）を示すが、

本文冒頭に「彼仁尊」とあるので、明らかに（甲）を前提とした、その縁起といふべき位相をもつ。

三、『鈴口決』は、「其後」つまり「鈴大事」の示現に預かった仁尊が、「伊勢ノ大善（膳）ノ助」に鈴の謂れを問い、鈴の「本説」を尋ねる顛末が記される。大膳助は伊勢神宮の関係者かと思われるが、彼は聖人に、その本説は知らず、夢見でなくば知ること無しと語る。更に仁尊が責め問うと「或人」の伝として、尾張国^ヘ熱田明神が天下る時、鈴を持ち下る所に初めて鈴を置き、それより所を移ったとし、その地を鈴置の社という、と熱田神最初降臨の地の縁起説を語り、それは「鈴大事」乙本と基本的に変わることはない。加えて、「我家」すなわち伊勢（神宮）では鈴を用いず再拝のみである故に知らず、知る人に尋ねよ、と拒む。そこで仁尊は（己の授かる大事）を語ろうと思うが、「神ノ内証」を安易に語れば「イタカ」（卑賤な宗教者）と呼ばれ、また凡夫に「神道」を語れば世間に漏れようと危ぶみ、思い留まった、という。「口決」と題しながら秘事口伝の開示に及ばない、一見奇妙な付録である。

ここに言及される鈴置社は稲沢市国府宮に現存し、中世熱田宮の縁起説が周縁の神社に関連づけられる一例である。また、熱田宮の外部から到来した聖人を主役として、伊勢神宮周辺の宗教者との交流を伝える点も興味深い。更に注意されるのは、「口決」で大膳助が鈴の一般的な本説として「抑鈴ト云事ハ、昔ノ易（駅）路ノ鈴振ハ、恋ノ人ノ声ヲ、鈴ノ音ノ下マテキクト云ヘリ。是モ次^シ第^ニ失^テナケレハ、亦反魂香ヲ焼ケハ、其煙ニ浮^ミ見^タ度人ヲ見^ル。今ハ末世ニテ、係機徳^モナケレハ（下略）」と説く駅路の鈴と反魂香の伝承は、同時代室町初期の良遍『日本書紀聞書』²（一四一九）にも見えるところであり、天岩戸の神楽に係る本文の注釈に言及されている。

鈴鹿山ト貧^ハ鈴^ヲ鹿^ニ付^テ、御幸ニ放^ツ也。駅路ノ鈴ト云、是也。天竺ニハ、駅路ノ鈴ヲ振^テ死人ヲ再^ヒ見、唐土ニハ、反魂香ヲ焼^キ昔ノ人ヲ現前ニ見^ル也。

断片的ながら、中世の日本紀講説に披露される知識と熱田宮に関わる神道大事の所説との重なりは、おそらく偶然ではなく、中世熱田宮の周辺に

展開したであろう縁起説と中世の日本紀神代巻を巡る神道説の重なりと連絡を示唆するものであろう。

中世熱田宮の縁起説は、真福寺本『熱田宮秘釈見聞』に、その大事口決の抜粋といふべき概要が示され、それは南北朝期成立の『神道雑々集』に見るように、草薙剣の熱田鎮座靈験縁起と並べられ、更に接続されて一体の記述として室町後期には『神祇官（熱田の深秘）』として成立するに至る。³ 菟足神社の熱田宮神道灌頂伝授も、その「大事」と称するような宗教テクストの位相において、こうした熱田宮の縁起説の神話体系に連なるものであろう。

ちなみに、菟足神主定広に良泉が大事を伝授した大永六年春には、奇しくも連歌師宗長が熱田宮に参詣し、法楽連歌を興行している（その後に、津島にも立ち寄っている）。『宗長日記』に描かれる熱田宮の景観と、その裡での宗匠と宮人との交流は、享祿古絵図にあらわされた社頭と参詣の賑わいのありさまと響き合うものであろう。

熱田宮社参。宮めぐり屋しづかに、松かぜ神さびて、まことに神代おぼゆる社内、この御神は東海道の鎮護の神とかや。宮の家ノ、くぎぬきまで、潮の満干、鳴海・星崎、松の木の間このま、伊勢海見渡され、此処の眺望、誰が言の葉も足るまじくなむ。旅宿瀧の坊興行。筑前守来あわれて、郭公松の葉ごしか遠干渴
神官人所望に、
うす紅葉松にあつたの若葉かな

（阿部泰郎）

注

- 1 津島市史編さん委員会編『津島市史』資料編（二）、一九七二年。
- 2 伊藤正義監修『磯馴帖』村雨篇、（和泉書院、二〇〇二年）三五八頁。
- 3 伊藤正義「熱田の深秘」（『人文研究』三一巻九号、一九七九年）、同「続・熱田の深秘」資料「神祇官」（同三四巻四号、一九八二年）。阿部泰郎「熱田の縁起——とはずがたり」の縁起語りから」（『国文学解釈と鑑賞』六三巻一二号、

一九九八年）、同「中世熱田宮の宗教世界―熱田をめぐる宗教テクストの諸相」『神道史研究』五八巻二号、二〇一〇年。

〔参考資料①〕鈴大事

〔端裏書〕「鈴大事 勾当大夫弘秀」

鈴大事

印外五古印 明

御方ヨリ授タテマツリタル鈴ノ大事也。未我朝ニヒロマラサル大事ナリトテ、

此大事ハ者、尾張ノ国熱田ノ社、仁尊籠タリシ時、天童天下 授給イテ云、泰天照大

神ノ御方ヨリ授タテマツリタル鈴ノ大事也。未我朝ニヒロマラサル大事ナリトテ、

仁尊ニ授給イテ云ク。聖人此間籠給ウコトヲ、天照大神御納受有、三度天下給テ

加護タマウ。古祖師先徳達、皆々此神ニ祈、所願成就給ウ事、必然也。此間

籠タル善悪ノ人、俱ニ守護給ウ。悪人ヲタニ守リ給ウ。況善□□時、計物語而、虚空

指テ飛失。

天照大神童子形 熱田明神 仁尊 仁順 伺仁

同海同光 □勢 仁光 芸瀬 厳海 弘秀

長禄二年九月廿三日

〔参考資料②〕鈴大事

〔端裏書〕「鈴大事 勾当大夫弘秀」

彼仁尊、諸国修行之時、尾張国熱田宮ニ一間ニ籠、願我所願者、徳モ福モホシカラ

ス、亦智恵ヲモイノラス、願クハ今生ノ間ニ一仏ヲ見タテマツリテ、ホタイヲエシメ給

トイノルハカリナリ。

抑、コノ熱田ト申タテマツルハ、三国ノ間ノ大伽藍、亦三国ニテ大三ノ宮也。カ、

ルメテタキ御神ニテマシマスアイト、顕密ノ祖師タチ、イツレモ此一ノ間ニ籠、諸

願ヲ成就シ給也。我等彼間ニ籠籠申也。若神土ニ御坐サハ、一ノ瑞相ヲ見セ給ヘト、深

キセイスル処ニ、十二三ハカリナル天童現シテイハク。抑鈴「云コトノユハレハシ

知給ヤラム、ト問給ヘバ、ワレイマタシラスト云。シリ玉ハスハヲシエタテマツル

ヘシ。此鈴ハ辰旦、日本ヨリモハシマラス、北天笠ノ和伊露羅国ヨリ、明神我朝ヘ

天下給事ハ、尾張國中嶋郡鈴置ノ社は也。彼社ニス、ヲ、キ給故也。問云。抑、鈴

ノ日本ニハシマル事、其謂云何。答。三熱クルシミヲ取籠、フリクタイテ苦ヲ止

ヤムル事ヲ表ス。然間、彼鈴ニ薩々ノ声有、此声ヲ聞、衆生畜類鬼神等、悉此コエヲキ

イテ成仏セスト云コトナシ。神ノ御前ニ鈴ト云、仏ノ御前ニ鈴ト云。意同シクスカタ

カハルナリ。鈴ノ大事、別ニ在之。

長禄二年九月廿三日

伝授師権大僧都厳海法印

授者秀弘

〔参考資料③〕鈴口決

〔端裏書〕「一 勾当大夫弘秀」

鈴口決

其後、仁尊、伊勢ノ大善ノ助ニ相給、鈴ノ謂委ク問イ給ウ時、大善ノ助答ヘテ云。本

説ヲハシラサレトモ、抑鈴云事ハ、昔ハ易路ノ鈴振ハ恋ノ人カコヲ、鈴ノ音下マテキ

クト云ヘリ。是モ次第ニ失ナケレハ、亦反魂香ヲ焼ケハ、其煙ニ浮見度人ヲ見。今ハ

末世ニテ、係機徳ナケレハ、夢ニ見ナラテハ无ト、物語セシナリ。聖人、サテ

ハ知リ給フニ、罪深、秘給フト宣時キ、大善助、懸、貴御僧ニイカテカ秘申ヘキ。或人云

ケルハ、是モ本説ヲハシラス候ヘトモ、尾張国熱田ノ明神、此国天下給時、鈴持下給

所、始鈴ヲイテ、其ヨリ所ニ移給トウケタマハテ候。ヤカテ其処ヲ、ス、ヲキ

ノ社ト申タテマツルナリ。其ヨリ鈴ナント申事、彼神ヨリ始ル事ニテ御坐ナリ。惣

神樂鈴ナラテハ余事ニナラサヌ事也。イカテカ存知申ヘキ。我家ニハ鈴ヲナラサス、

唯再拜斗也。其上、伊勢ニカキテ用ネハトテ、日本ニ有程ノ事ヲシロシメサヌハ不

覚ナリ。能々シラム人ニ御尋候ヘト申間、力ナクテ、聖人語ハヤト思ハレケレトモ、

神ノ内証ヲ輒語ラハ、人、イタカト申ヘシ。泰クモ神道ヲ浅タト薄地凡夫ニ語聞カセハ、

世間ニモラスヘシ。可秘々々。

長禄二年九月廿三日

伝授師権大僧都厳海法印

授与勾当大夫弘秀

胎内五位図について

―菟足神社蔵『胎内五位大事』との関連で―

はじめに

本稿は、今回菟足神社聖教のひとつとして見いだされた『胎内五位大事』をめぐって、その根拠となった胎内五位図についての概要を解説するものである。

「生」を苦と規定した仏教の根本思想にとって人間発生のメカニズムは批判的な立場から当初より検討されてきた。ところが平安後期より進展する天台本覚思想や密教の本有思想は、男女交会とその結果としての受胎・出産のプロセスを、真理獲得のプロセスのアナロジーとして把握し、それに基づく様々な言説を生み出した。その典型が胎内五位図である。胎内五位とは『俱舍論』等に典拠を持つ胎生説で、はやくから日本にもたらされたが、中世になると東密諸流の秘説化の流れのなかで、図解化されて胎内五位図が作られたのである。その影響は東密内部に止まらず、中世神道説や古今注等の文芸にまで及んだ。菟足神社蔵『胎内五位大事』も、中世神道への受容の一例である。

一、胎内五位図の濫觴

胎内五位図とは、胎内における胎児の変化を五つの段階で図示したものである（図参照）。胎内五位とは、「羯頼藍」・「頰部曇」・「閉戸」・「建南」・「鉢羅奢佉」五つをいい、インド仏教より発する胎生論である。その説明としてしばしば採り上げられるのは『俱舍論』である。巻九「分別世品第三之二」には次のようにある（原漢文を私に読み下す。以下、引用文献は全て読み下しとする）。

謂く、母腹胎中分位五有り、一に羯刺藍位、二に頰部曇位、三に閉戸位、四に鍵南位、五に鉢羅奢佉位、此の胎中の箭、漸次転増し、乃至色根形相満位



胎内五位図（『灌頂秘口訳』）

し、業の起る所の異熟風力に由り、胎中の箭を転じ産門に趣かしむ。

但し、五位を図像化することは、日本において独自に成立したもので、その背景には、東密における、独自の解釈がある。即ち、院政期以降、東密諸流においては、凡聖ともに本覚仏性が内在することを説く本有思想と五位説が結びつけられたのである。その図様は、「羯頼藍」が円形、「頰部曇」が船形、「閉戸」は舟形の中央部が隆起した形、「建南」が五輪形、「鉢羅奢佉」が仏形（人形）である。

胎内五位図の存在を示す確実なる初見は、覚鑠の『打聞集』所収「十住心論」講義、保延五年（一一三九）五月七日の段である。

又云く、種子とは、且く胎内に入る時の、羯頼藍、赤白二滯和合のごとし。露のごとく円形なり。赤色は瞋恚の色、白色は慈悲の色なり。仏心は大慈悲を体と為す。故に其の色、白し。『菩提心論』に、「内心の中において、日月輪を觀ず」と云う。赤白二滯の義、亦た之に有り。

然りと雖も、凡夫の位は二種和合し、成仏の時唯だ白色なり。故に仏心如満月と云う。亦た、淨白淳淨の法を満足すと云う。二種和合の義は、凡夫赤色の内に、本性清淨の仏性有る故に、二種和合して、この義を表す。吾具縛の身内に、大悲毘盧遮那如来の種子有り。是を「𑖀」字と名づく。即ち此の種子、虚空に遍する故に、空点を置き、円満の義を表す。故に此の点を円点と名づく。「𑖀」字亦た円形なり。円点を重ねる事、円円海徳を表す。此の円なる形、漸く五位を経る間に、支節出生すと。此は三昧耶形五輪卒都婆なり。この卒都婆、漸漸莊嚴して、形像と成る。是れ胎外の位のごとし。これを種子三昧耶尊形というなり。

すなわち、羯賴藍⇨円形は、赤白二滯（父の精、母の血）和合を意味するとともに、日・月輪、大日如来の種子^二字を意味するとする。その後段階で支節、すなわち手足が生じるが、それは五輪形から形像（仏形）へと変化するとしている。この段階ではまだ図像は起こっていない。ただ、円形（羯賴藍）⇨五輪形（閉戸）⇨仏形（鉢羅奢佉）への変容が示唆されており、これが五位図の原型であろう。

同様の説は『最後灌頂常行心要法』にも見える。本書は、即身成仏のための「最後灌頂」と「常行心要法」について説いたもので、成尊（二〇一二七四）或いは勝覺（二〇五七一一二九）の撰述とする。偽撰説も根強く、鎌倉時代以降の述作とする論者もいるが、私は院政期の述作として差し支えないと考えている。

本書ではまず即身成仏の法を、体・相・用・不二無礙の四門に分ける。そして最後の不二無礙の即身成仏は体用相を包摂するとした上で、さらに次のように説く。

事相に就きて无二礙の即身成仏を顕はすべし。言う所の字・印・形とは、字は即ち種子、法曼の位、所謂理智二法（赤白二滯）をば、亦是双円月と名づく。印は即ち三昧耶形の位、亦是五輪形と名づく。形は即ち大曼荼羅の位、亦是れ人形の躰なり。則ち此の三種を以て、五相の位を収む。初の種子は双円の位、通達・修菩提の二種を撰す。次の三昧耶形は五輪の位、即ち成金剛・証金剛の二種を撰す。次の大曼は人形の位、即ち自証无上の一種を撰す。則ち是れ次の如く字・印・形の三は、各互に相通ずるを、羯磨曼荼羅と名づく。則ち立つる所の胎内の豎の次第なり。

すなわち、不二無礙の即身成仏を、字・印・形（象徴物）で表すと、字は法曼荼羅⇨双円月、印は三昧耶曼荼羅⇨五輪形、形は大曼荼羅⇨人形となる。五相成身（修行の階梯）で表すと、双円形⇨通達菩提心・修菩提心、五輪形⇨成金剛心・証金剛心、人形⇨自証無上に配される。そしてこれは「胎内の豎の次第」すなわち胎児の成長段階と対応するというのである。ここでも『打聞集』と同様に、五位図の前段階である双円月・五輪形・人形のイメージが提示されている。

「最後灌頂常行心要法」では、続いて最後灌頂の作法として「直に受生処胎の次第を以て、即ち自身成仏の思念を作すべし。最初羯賴藍の位より、下諸位を経て、一々の儀相、此れ即ち秘密標識に非ること莫し」として、『打聞集』と同様の日月輪⇨両部不二⇨赤白和合⇨羯賴藍と説く。さらに別のところで、胎内五位について、次のような説明を行っている。

…父母所生の赤白二滯は^二字の法水なり。何を以ての故に。謂く五大所成なるが故に。赤白二滯は大日の尊形なり。何を以ての故に。謂く二色を以て顕せるが故なり。此れは謂く、横を以て演ぶ。若し豎を依て習はば、入胎の初めの七日は即ち是れ種子の位なり。次の三七日は三昧耶形の位なり。五七日已後は大日の尊位なり。また次に五転成身は五仏所成の身なり。謂く、初七日（…）は東方・大円鏡智、亦是阿闍仏と名づく。次の二七日（…）は南方・平等性智、亦是宝生仏と名づく。次の三七日（…）は西方・妙觀察智事、亦是阿弥陀仏と名づく。次の四七日（…）は北方・成所作智、亦是不空成就仏と名づく。次の五七日は中央・法界体性智、大日如来と名づく。第五七日の五智・五仏所成の身を直に自証の成仏と定む。此の謂ひは豎に就ひて論ず。若し横に就ひて論ぜば、五智を具す。謂く、前後・始終・五大等の故に。此れ亦た五相成身なり。

右の記述を表示すれば次のようになる。

胎内五位	方位	五智	五仏	五相成身
初七日（羯賴藍）	東方	大円鏡智	阿闍仏	通達菩提心
二七日（頰部曇）	南方	平等性智	宝生仏	修菩提心
三七日（健南）	西方	妙觀察智	阿弥陀仏	成金剛心
四七日（閉戸）	北方	成所作智	不空成就仏	証金剛身
五七日（鉢羅奢佉）	中央	法界体性智	大日如来	自証無上

以上のように、十二世紀段階では、原型的なイメージはできあがってはいたが、具体的な図像化はまだ行われなかったらしい。

二、胎内五位図の成立

胎内五位が具体的な図像を伴って現れるのは十三世紀以後のことである、従来はその初出として、『真言宗全書』所収の実運（一一〇五〜六〇）『瑜祇経秘決』が挙がっていたが、同書については従来から偽撰説があり、いま見たように、同時代の『打聞集』『最後灌頂常行心要法』ではまだ五位図が成立していない可能性が高いことから、ここでは考察の対象から除外する。

それ以外で、現在のところ胎内五位図が確認できる十三世紀〜十四世紀のテキストとしては、仁和寺蔵『五智蔵秘抄』（弘長元年写、円爾『瑜祇経見聞』（文永十一年成立）、癡兀大慧『灌頂秘口訣』（十四世紀初頭成立）、『円満抄』（観応三年以前成立）、『石室』等が挙げられる。ここでは特に『石室』を採り上げる。

『石室』は、『遍照金剛（空海）撰』とする「自性法身大灌頂伝法秘密生起本源法成道自証極位」、「義註秘決一卷」と題する元杲（九一四〜九五）によるその注解、「面受一卷」の表題を持つ三宝山院流の実運（一一〇五〜六〇）の口決の三巻より成る。冒頭には建久七年（一一九六）に、実運の瀉瓶たる勝賢（一一三八〜九六）がその末期において成賢（一一六二〜二三一）へ伝授したことを示す成賢自身の序、本文の後には勝賢の跋文が付され、実運―勝賢―成賢という三宝山院流の正嫡によって相伝された秘書たることを示す。さらに勝賢跋に付して、三宝山院流の正嫡を継ぐ憲淳（一二五八〜一三〇八）から後宇多院（一二六七〜一三二四）への伝授を示す「嫡々相承血脉」があり、「石室」なる題号が後宇多院の命名にかかるものなることが記される。本書の現存諸本には、共通して建武三年（二三三六）十一月十八日に、後醍醐天皇（一二八八〜一三三九）所持本を正本として宗恵なる者が書写した旨を記す識語が付されている。本書の成立については、勝賢から成賢への伝授はもちろん、憲淳から後宇多への伝授についても仮託だと考えられる。さらに、後醍醐所持本の書写云々も捏造であろう。ただ、後

醍醐の周辺にいた醍醐三宝山院流系の人物が、述作に関与していたと考えられる。

「自性法身大灌頂伝法秘密生起本源」は、胎内五位図を列示し、末尾に「以上胎内五位五転則是五相成身」と記す。さらに各図には、金剛界五仏（阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就・大日）及び東南西北の十六菩薩の種子を配する。ただ諸尊の種子は通常と異なり、『瑜祇経』序品第一の所説に拠っている。「遍照金剛」即ち空海の作と称す。「義註秘決一卷」は、元杲（九一四〜九五）作と称し、空海図の五仏・十六菩薩の種子を漢字に置き換え、更に五位に中有（初七日・二七日・三七日・四七日・五七日）・方位（東・南・西・北・中央）・五転（発心・修行・證菩提・涅槃・方便究竟）・五阿を配し、さらに五位変移の過程を、伝法灌頂の入壇から、出堂・歎徳までの各段階に配当した図で、前図の注解といったもの。最後の「面受一卷」は、先の二伝についての実運の口決で、冒頭「当に知るべし、入壇灌頂の次第伝授の義とは、則ち此の胎内の五位・法爾五輪の成道・自然正覚の旨を指示す」とあり、胎内五位が灌頂次第と重なることを説いたものである。

さらに、鎌倉後期になると五位図の本説としての偽経が作られる。『生死本源経』である。現在真福寺、猿投神社、西教寺等に伝来するこの經典は、正式名「父子天性三世相統十界輪円照無始无終生死本源経」と称し、阿日法三蔵訳とする。冒頭の序品で、南天鉄塔において金剛薩埵が龍猛菩薩に説いた教えとする。以下、貪瞋癡品第二、十二因縁品第三、入胎品第四、出胎品第五、入涅槃品第六で構成される。このうち胎内五位の説が出てくるのは「入胎品」である。以下にその最初の部分を引く。

亦復告げて言く、一切衆生は、因に依て此の父母和合して而生ず。入胎の始めの時、三魂は即ち三辰宮より下りて母の耳より入り、男子は右穴、女子は左穴、七魂は即ち穴宮より下り、父の精は肺臓より月宮に転入す。母の精は心臓より日宮に転入す。父母の二精、日月両宮、能住・所住不二の名号なり。五臓の精神は五根より肝臓に入り、歳星は眼根より心臓に入り、瑩惑は舌根より脾臓に入り、鎮星は口中より肺臓に入り、太白は鼻根より腎臓に入り、辰星は耳根より入る。此の五星と三魂・七魂とは是れ最初成就の十五金剛本

有薩埵と名づく。胎内成身之位に於て、十月満月、三十八を経。第一七日には歌羅邏と名づく。身相初て現ず。猶ほ生酪のごとし。第二七日には安浮陀と為す。状ち稠酪のごとし、第三七日は名づけて閉戸と為す。状ち葉杵のごとし。第四七日は名づけて鍵南と為す。五輪具足す。第五七日は鉢羅奢佉、五根具足す。両脛両肩及其身首而も便ち出現す。……

密教の胎内五位説は、中世末期になり、根来寺の教雅によって『三十七尊配位鈔』が著され、理論的整理がなされる。

三、胎内五位図と中世神道

胎内五位説及び五位図は、既に鎌倉中期頃から、密教流派の秘説たることを越えて、中世神道書や古今集注釈にも取り入れられるようになっていた。中世神道では、早くは弘安九年（二二八六）以前成立の『天地靈覚秘書』の中に次のように見える。

続生入胎初、先住虚空種子位 其後、漸漸転形、成五輪体三昧耶形 次五輪変、成人体尊形也。曼多羅。

右は、五位というより『打聞集』等の三段階の変容と思しい。次いで、室町初期に成った『日本書紀』の注釈書たる春瑜本『日本書紀私見聞』には以下のようにある。

私云、天神ノ始メ、鶏ノ卵如ト云事ハ、胎生ノ如也、内典ニハ、最初伽羅藍ト、又ハ安部曇云、如レ此カイコノ如シテ次第興氣形体有テ、又位ヲフル也、安ルニ今此ヲ神明ノ始モ亦如是成可シ、何況於人間乎、或抄云ク、天ニ化セルヲ名ニ天神ト、地ニ居ルヲ名ニ地神ト、又云、在ヲハ胎内ニ天神ト名々胎外ニ生ルヲハ地神ト云也、故ニ人ノ魂魄ニ、神ノ字ヲツカウ事、以テ是故也、可恐可恐、

ここは『日本書紀』神代巻の冒頭「古、天地未だ割れず、陰陽分かれざりしとき、渾沌たること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり…」の部

分を注釈したもので、鶏卵のごとき原初の姿を羯賴藍と見立て、五位の変化を神の発生と重ねあわせている。つまり、胎内五位を媒介として、神話記述の中に、天地の創造と個々人の発生の二重の意味を読み込んでいるのである。

『伊勢所生日本有識本性仁伝記』は、『伊勢物語』の注釈書という性格を持つ御流神道系の伝書である。内容は「伊・勢」の二字に関する秘説（「伊勢」を男女和合の意味と解する）を、十章に分けて類聚したものだが、その第三「伊勢初成就法之事」は、胎内五位図を掲げて、「伊勢」の深秘を説いている。ここでは最初の羯賴藍（円形）のくだりを引いておく。

胎蔵界、母ノ精肉（東方）、伊勢和合一如心也。金剛、父精骨、天地和合勢徳ナリ是ハ伊勢ノ五体ノ精、始カラ蘭種子。

貪愛煩惱ノ始、父母ノ交会時、赤白二諦和合スル時ノ体也。赤色ノ^イ字ハ母ノ精徳也。衆生ノ肉ト成種子也。白色ノ^勢字ハ父ノ精息也。是ハ衆生ノ骨ト成。此赤白ノ二ツノ^イ字ハ、合金ノ両部大日遍照ノ体也。因果常住ノ仏牀ナル故ニ、衆生ノ身ノ内ニ両部ノ大日座ス。始テ五百余尊・七百余尊ノ鎮ニ住給フ也。此伊勢ヲ悟レハ、即身成仏

以上の神道以外には、和歌秘伝や諸芸道にも、胎内五位図が取り入れられた。たとえば、『古今和歌集』の秘伝たる「古今灌頂」にも五位図が取込まれている。ここでは、一例として、大東急文庫『古今和歌集灌頂』所載の図より示す。

抑仏ノ卅二相、哥五句通ル事、人牀ヨリ起。是又哥ノ余風之詞ニ侍ヘリ。是ヲ長哥ト定む。長哥ト書テ謂人ト成と読リ。其謂ハ、金修徳顔

^イ ほの／＼と、又云若ニト云。人ノ子胎内ヲ生姓ヲ云也。

^勢 あかしのうらの明石トハ、心仏、業種之闇ヲ明ル仏姓ナル故也。

浦トハ地水火風、浦ニ見ヘタリ。凡国等謂、此理ニ不可成。然ハ牀ニタトヘリ。已ニ生テ日月ノ光ヲ見ル□譬フ。

^イ あさきりに。仏性ヲ読故也。

嶋かくれ行く。成人スル行末ノ心跡ナキト云也。四魔、貪欲・瞋恚・愚痴・愛別云云。船をしそ思ふ。此間人丸ヲ為鉢（舟トハ五鉢。是を子ニタトヘリ）

（中略）

発心胎蔵界、此母ノ精肉也、先衆生ノ胎内ノ五位者、

是羯頼藍、姓貪愛煩惱、父母交会時、赤白二諦相和ル形也。赤色ノ**刃**字ハ母ノ姪也。衆生ノ肉ト成也。白色ノ**刃**字ハ父精也。是者衆生ノ骨トナル。此赤白二色ノ二ノ**刃**字ハ、胎金兩部大日如来ノ因果、常住ノ仏種也。一切衆生身肉ニ、兩部ノ大日始テ、五百余尊鎮住給フト云故ニ、覺時ニハ即身成仏也。

是ハ頰部曇云也。二七日ト云ニハ、加樣ノ体ニ成也。是ヲハ明ト云。此左ノ方ノ高キハ、兩部大日種子ノ赤白二色、**刃**字ノ左右ノ肩ト成鉢也。

是ハ閉戸ト云也。三七日ト云ニ成。此鉢ト三胡形ト成、骨漸クカタマル、左右ノ肩頭也。三古形ニハ三密菩薩三身三業形ト成也。

是鍵南云也。此ハ四七日ト云ニ、此鉢ニ成也。既此形本覺ノ如来、法然自覺五部ノ智ト成形成也。



是ハ五七日、此形ト成也。是ヲ鉢羅奢位ト名ク。是仏果円満形也。如此母ノ胎内ニシテ、五智円満ト成テ、求菩提観念ヲ発シテ、無所作ノ位住シム、雖然下化衆生ノ願ノ為ニ、母胎内ヲ出テ、随縁利生ノ用ヲ施也。但凡夫ハ無明ノ酒ニ酔ル性徳ノ理仏也。諸仏断無明ヲ修徳仏也。

爰以、和歌五句卅一字ヲ成也。サレハ和哥ノ実体トハ、此**刃**字本来ノ成作也。**刃**字トハ我等カ一心也。我等一心即一切種智ト成也。故ニ大和哥ハ人ノ心ヲ種トシテ、万ノ言葉ト成ナリト云リ。又大日ト書テ、ヤマト、読リ。大日即**刃**字也。是ヲ釈スルニ、大日即人ノ心ナルカ故、心ヲ種トシテ、万ノ言葉ト成リト云。舌相言語、皆是真言不思議ノ道理ナルカ故也。カ、ル本来ヲ明ニシテコソ、心ヲ種ト哥ハ読ル也。

先の『伊勢所生日本有識本性仁伝記』と比較すると、説明の文言が酷似している。海野圭介が既に指摘しているように、十三世紀の仁和寺蔵『五智蔵秘抄』の五位図の文言とも同文関係にある。つまり、胎内五位図は密教・神道・文学に跨がって、相互に密接な関係を持ちながら展開していたのである。

四、おわりに―菟足神社蔵「胎内五位大事」の位置

神道においては、胎内五位と並んで、南北朝期あたりから胎内十月図が起こる。『箱隠』といわれるものがそれで、その図様は五位図を発展させたものである。即ち、受胎―錫杖・一月―独鈷・二月―三鈷・三月―五鈷・四月―金剛鈴・五月―払子・六月―宝珠・七月―鉢・八月―羯磨・九月―五輪・十月―尊形に宛てて図示される。これが五位図を元に行っていることは九月・十月の図様からも窺える。また、これとは別に「胎内九月替様図」が存在した（叡山文庫真蔵『神道書』・前出『十三仏秘中極秘之口決事』所収）。その特徴は、胎児の成長と死後の中陰が重ね合わされていることで、生と死が表裏一体のものとして説明されることである。さらに、



各月の本地として十三仏が配当される。また胎内十月を一年の十二月月に当てはめ、月々の行事の意義を胎児の成長の姿と関連づけた『神道十二月卷』なども現れた。

いっぽう胎内五位図も、神道においては用いられる。先に見た『伊勢所生日本有識本性仁伝記』系統の伝書がその代表である。今回発見された『胎内五位大事』もそのひとつである。本伝の特徴は五位図のほかに蓮台に座する五色^五字の図が載る。類似の図様は前出の『五智蔵秘抄』にあり、関連性が注目される。



蓮台に座す阿字（『胎内五位大事』）

五臓のうち、心、脾、肺、肝の文字を配する。腎は黒の部位か。

五位（『胎内五位大事』）

五輪と五体を一体に描く。

以下に、本稿に関わる先行研究を参考文献として掲げる。

（伊藤 聡）

（本資料紹介全般に関する文献）

阿部泰郎「五形祭文と五蔵曼荼羅——中世日本の宗教的身体論の系譜」（斎藤英

喜・井上隆弘編『神楽と祭文の中世——変容する信仰のかたち』思文閣出版、二〇一六年）。

阿部泰郎・米田真理子・伊藤聡『宗教的身体テクスト資料集』（EASタリン大会パネル資料、二〇一一年）。

阿部泰郎・米田真理子『五蔵曼荼羅』資料集（阿部泰郎編『中世宗教テクスト体系の復原的研究』名古屋大学、二〇一二年）。

Andreeva & Steavu (ed). Transforming the Void: Embryological Discourse and Reproductive Imagery in East Asian Religions (BRILL, 2015)

伊藤聡「三寶院流の偽書——特に『石室』を巡って」（錦仁・小川豊生・伊藤聡編『偽書』の生成——中世的思考と表現』森話社、二〇〇三年）。

同「『石室』についてのメモ」（『日本古典文学における偽書の系譜の研究』科学研究費補助金（基盤（B）（2））、二〇〇三年）。

同「随心院蔵『三十七尊配位鈔』その翻刻と解題」（荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』Ⅲ 大阪大学、二〇〇八年）。

同「中世天照大神信仰の研究」（法蔵館、二〇一一年）。

同「神道の形成と中世神話」（吉川弘文館、二〇一六年）。

海野圭介「和歌注釈と室町の学問」（『中世文学』六一、二〇一六年）。

同「五蔵曼荼羅和会釈」と和歌注釈——『玉伝深秘卷』『玉伝和歌最頂』『深秘九章』の説く和歌観の淵源を探る」（『国文学研究資料館編『中世古今和歌集注釈の世界——毘沙門堂古今集注をよみとく』勉誠出版、二〇一八年）。

小川豊生「京都大学図書蔵『神道大事』——〈翻刻と解題〉」（『日本英史編』日本文学における偽書の系譜の研究』奈良女子大学、二〇〇三年）。

同「中世日本の神話・文字・身体」（森話社、二〇一六年）。

落合俊典「スペインサ本の道範撰『五智五蔵秘密抄』」（『国文学研究資料館編『絵が物語る日本——ニューヨークスペインサコレクションを訪ねて』三弥井書店、二〇一四年）。

亀山隆彦『駄都秘決鈔』の五蔵曼荼羅理解」（『仏教学研究』七一、二〇一五年）。

同「中世真言密教における五蔵曼荼羅の意義——『五蔵曼荼羅和会釈』を中心に」（『末木文士編『比較思想から見た日本仏教』山喜房、二〇一五年）。

同「『東寺印信等口決』解題」（『中世禅籍叢刊』4『聖一派』臨川書店、二〇一六年）。

同「六代と赤白二帝——真言密教思想における胎生学的教説の意義」（『真宗文化』二六、二〇一七年）。

末木文士『『聖一派』総説』（『中世禅籍叢刊』4『聖一派』臨川書店、二〇一六

年)

苦米地誠一『最後灌頂常行心要法』について」(『平安期真言密教の研究』ノンブル社、二〇〇八年)。

新修豊田市史編さん委員会『豊田市史研究特別号 猿投神社の典籍』(豊田市、二〇一六年)。

ルチア・ドルチェ「儀礼により生成される完全なる身体—中世密教の『非正統的図像』と修法をめぐる」(阿部泰郎編『日本における宗教テキストと諸位相と統辞法』名古屋大学、二〇〇八年)。

同「二元的原理の儀礼化—不動・愛染と力の秘像」(ルチア・ドルチェ、松本郁代編『儀礼の力』法蔵館、二〇一〇年)。

Dolce, Lucia. Duality and the Kami: The Ritual Iconography and Visual Constructions of Medieval Shinto (Cahiers d'Extrême-Asie 16 Rethinking Medieval Shinto, EFEO, 2010)

中村一基「胎内十月図」の思想的展開」(『岩手大学教育学部研究年報』五〇一、一九九〇年)。

三輪正胤『和歌秘伝の研究』(風間書房、一九九四年)。

〔付記〕

本報告にあたり、御高配を賜りました菟足神社宮司 川出巖郎氏(職位は調査時)、豊川市文化財保護審議会委員 中村重藏氏、熱田神宮文化部長 野村辰美氏、豊橋市美術博物館 鶴田智大氏、國學院大學研究開発推進機構 大東敬明氏、東京大学史料編纂所 藤原重雄氏に深く感謝申し上げます。

本稿は、東京大学史料編纂所二〇一九年度一般共同研究「参詣曼荼羅図を中心とする富士山信仰史料の総合的研究と公開」(代表大高康正)の助成を受けて行われた研究の成果の一部です。

(あべ みか 歴史文化学科)

(おおたか やすまさ 静岡県富士山世界遺産センター)

(いのうえ たくや 富士市市民部文化振興課)

(あべ やすろう 龍谷大学文学部)

(いとう さとし 茨城大学人文社会科学部)

(みよし としのり 名古屋大学文学研究科)

付属人類文化遺産テキスト学研究センター)

(いのせ ちひろ 名古屋大学文学研究科)

付属人類文化遺産テキスト学研究センター)